

---

# ポケモンヒストリー

名無し

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンヒストリー

### 【Zコード】

Z6645Z

### 【作者名】

名無し

### 【あらすじ】

さまざまな地方を巡り歩いてきたサトシは、その実力を買われ、なんとカントー最強のトレーナー・ワタルへの挑戦権を得る！しかし、世界は広かつた……。もっと強くなりたいと闘志を燃やすサトシは、初心に戻るため再び各地方への旅を開始する！熱いバトル、さまざまな陰謀、そして恋……。はたして、彼に待ち受けるものとは！？

## キャラ紹介

サトシ 17歳

「気合い」と「根性」でできた若きポケモントレーナー。相棒は「ピカチュウ」。そして夢もずっとポケモンマスター。そんな彼も成長し、トレーナーとしての実力は今やカントーでは1、2を争う程に。しかし、調子に乗りやすい所や無鉄砲さなどは変わらず、精神面の成長はあまり見られない…………と思いまや、可愛い女の子を前にするとたま～に赤面する」とも。でも周りと比べるとやはりまだまだ鈍感。

ハルカ 17歳

「ホウエンの舞姫」の一つ名を持つ。コーディネーターとしての実力はもはやトップクラス。

当然外見も成長し、だんだん「可愛い」から「綺麗」になってきた。何とファンクラブまでできたとか。内面的にもすっかり大人………になった訳ではなく、同年代のヒカリや弟のマサトにまでいよいよにからかわれるなど、「大人の女性」までの道のりはまだまだ遠い（笑）。

最近はコンテストでどうか、周りを完全シャットアウトして猛特訓しているらしい。

タケシ 21歳

ポケモンブリーダーにして、ビシティジムリーダー。その幅広い知識でサトシ達をかげながら支える。皆のお兄さんの存在。しかし、

お姉をあああああん！！！」なのは今でも変わらない……。

### カスミ 19歳

自称「世界の美少女水ポケモンマスター（長つ）」。水ポケモンをこよなく愛するハナダシティジムリーダー。軽そうなイメージとは裏腹にジムリーダーとしては誰もが一目置く存在。サトシだけでなく、ハルカやヒカリにもよく相談を受けるなど皆に頼られている。タケシがお兄さんなら、彼女は皆のお姉さん役と言つたところ（？）

### マサト 14歳

ハルカの実弟。相変わらず生意氣だが、彼ももう立派なトレーナーに。尊敬する父の様なジムリーダーになるべく、今は修行のため各地方へ旅に出ている。

姉であるハルカのことは気にかけていない様に見せてても実はお姉ちゃん子だったり（多分）。

### ヒカリ 17歳

今をときめく「シンオウの妖精」。その人気はもはやアイドル並。同じコーディネーターであるハルカのことは良き友人兼好敵手として今でも慕つている。

超おしゃれ好きで人懐こく、今で言つ「守つてやりてえ」タイプ。でもカスミと一緒にサトシやハルカをからかうなど、以外と人を扱うのが上手いところも（良い意味でだよ？）。

同じくライバルであるノゾミと共にトップコーディネーターを目指し精進中。

## キャラ紹介（後書き）

若干アニメと設定が違うかもしれません。ご了承を……。

## 旅立ちと始まり（前書き）

作者はサトハル、シユウハルがすきです。  
苦手な方はご注意を。

## 旅立ちと始まり

夜……

とある地方のとある街の高いビル……

????? 「…………」

その屋上から街を見下ろす人物が一人……  
黒いローブを纏い、表情も頭からすっぽりかぶつたフードで見えない。

まさしく…………漆黒…………

夜空に浮かぶ月の光が無ければ、その姿は夜の闇に完全に紛れていただろう……

????? 「…………」

バタバタ

夜風がローブを撫でる

その漆黒の人物はただただ、摩天楼の上から眼下に広がる街を見下ろしていた……

サトシ「じゃ、行つてきまー！」

ハナコ「まつたくせしないわね……。もう少ししゃべつてこなが  
いこなが……」

サトシ「そんなんじつとこへりんなこよー俺はもつと……まつと強く  
なるんだー！」

ピカチュウ「ピカチュウッ……」

帽子の少年……サトシの肩に乗るピカチュウが「同じくーーー」と  
言わんばかりに鳴く。

ハナコ「ホント、あんたはソレばっかりね……」

サトシ「何だよ母さん。もつと明るく見送つてくれよ……。愛しい  
息子の決意の朝なんだぜ？」

サトシが少し冗談気味に言ひ。

マサラタウンの一般家庭の「」普通の光景。

ハナコ「ハイハイ。じゃあ、気をつけていってらっしゃい。身体は  
大事にね？」

サトシ「おうー行つてきまーす！」

遠ざかっていく息子の背中を見る…………もう何度もしきなつたわね  
たことか

でももつあの子もーーーすいぶんたくましくなつたわね……

ハナコはその背中が点に見えるほど小さくなるまで見つめ、やがて  
家に入つていった。

サトシ「うーん。ちょっと叫んでいたかなあ……」「

ピカチュウ「ピカ！」

ハナダシティの駅の西口。

サトシはある人物達と待ち合わせしていた。

時計を見る 待ち合わせ時間15分前 サトシにしては早い  
しつかし変わったなあハナダシティも…………  
いわゆる高層化。もともとそんなに田舎町というわけではなかつた  
が、10歳のころ自分が初めて訪れた時と比べれば、高層ビルやら  
なにやらが多くなつていた。

サトシ「この駅も昔は小ぢやあつたよ～」

回りながらオレンジ色の髪の少女が歩いてくる。

カスミ「ちょっと…そんな大きな声出さないでよ！恥ずかしいじゃ  
ない！」

サトシ「いやだつて、こんな広いところれくらいじやなきや聞こえないだろ?……いやあ、でも久しぶりだなあカスミー。ちよつとは女らしくなつたんじやね?」

隠かこむよつては感がひじゆんで。

サトシ：ああ、たゞで元がアレじゃあ  
ダン……ソレ当たつたら怪我……」「

カスミが近くの小石を拾おうとしたので、サトシは続きを言うのをやめた。

カスミ「つたく…………ん？あれタケシじゃない？」

サトシ「あ、ホントだ！お～いタケシイイ！！こつちだこつち～！」

！」

タケシ「おお一人とも！久しぶりだなあ！」

細田の男。タケシの登場だ。

サトシ「久しぶりだなタケシ！どうだ？彼女できたか？」

〔冗談氣味に言つサトシ……………が

タケシ「サ、ササササササトシが……………彼女つて……………言つた……………！？」

サトシ「何だよ、そんなびっくりすんなよ～！冗談だつて！」

タケシ「サトシからその部類の冗談が出るとはな……………。この六年あまりの月日は伊達じやないつてことか……………」

カスミ「アタシもちよ～つとだけビックリしたわ。でも行動が突飛なところは変わりないわね……………」

タケシ「だな。いきなり「初心に戻りたいから最初のメンバーで旅しよう」だなんて……………。まつたく人のこと考えてるのかよ。」

サトシ「ハハハ。でも一人とも来てくれたじやん。やっぱ仲間だよなあ～俺たち！」

サトシは数日前、かのカントー最強のトレーナー、ドラゴン使いのワタルとバトルした。

何故そんな変則マッチが実現したかと言つと、カントーリーグ協会がサトシの有望性を買い、何とポケモンリーグ、四天王リーグともにすつ飛ばし、特別にワタルへの挑戦権を与えたのだった。

だが結果は……………完敗。

何とか三体を戦闘不能に追い込んだものの……、最後はワタルのカイリュー相手に手も足も出ず、ストレート負け。その圧倒的な力の差にサトシは睡然としたが、

ワタル「君の再挑戦を心から待っている。」

その言葉でサトシは吹っ切れた。

世界は広い…………俺はまだまだ強くなれる…………

というわけで初心に戻り、一番最初に旅をしたメンバーで旅をしようというのだ。

サトシ「まつー回るのはカントーだけだからさーそれまでの間つきあつてくれよー！」

ピカチュウ「ピッカチュウー！」

ピカチュウが「『めんねー』と言わんばかりに可愛らしく鳴く。

カスミ「しようがないわね。可愛いピカチュウに免じて、つきあつてやるわー！」

タケシ「まあ俺たちにとつても、ためになるかもしれないしな。ブリーダー修行の旅、再開だ！」

サトシ「そうじなくちゃーよろしくなー一人ともーーー！」

バンバンーと二人の肩を叩くサトシ。

カスミ「つターもうちょっと加減しなさいよーーーで、カントー回つた後はどうすんの？」

サトシ「うーん、まだ決めてない。ホウエンにでも行つてみようかなあー……」

カスミ「あら？ ジョウトすつ飛ばしてホウホンなんて……喜ぶわよ～？ 愛しのハルカア～。」

わらわの仕返しと並わんばかりにカスミが「冗談気味に言つ。

サトシ「いっ、愛しつ……ちぎ……よ……別に余つに行くだけで旅に誘おうとしてた訳じゃ……」

カスミ「ほあ～う、会いに行くつむりだつたんだあ～。」

サトシ「だ、だから違つ……ちよつと世話になつたから顔出しひつと思つただけだつて……」

カスミ「そーやって必死になつてんのが怪しいのよ。つてか顔真つ赤よお～？」

サトシはもつじどりもどり。

でもこーいう冗談が通じる様になつたんだからすゞ成長よね。

サトシ「シッシッ……ああ～もつ～ちよと行くぞー？」

ズカズカと進んで行くサトシ。

カスミ「ちょっと、行くつじどり行くのよー！」

タケシ「逃げたか。」

カスミ「も～、面白かったのに……。」

タケシ「……そういうお前はどうなんだ？」

と今度は、タケシがカスミ同様、にやけながら言つ  
……が

カスミ「フフフ。ヒ・ミ・ツー。」  
タケシ「なつ……何い！？」

思いがけないカスミの返答に驚くタケシ。  
じょ、冗談のつもりで言つたのに……

カスミ「ハーアイハイ、この話はここまで。せつ、サトシ追いかけま  
しょ? このままじゃアイシ迷子になるから。」

そう言つてサトシを追いかけるカスミ。

タケシはそんな彼女の背を見る……

タケシ「…………」  
「うりや、俺たちもうかうかしてられないな。サト  
シよ。」

静かに呟くタケシであった。

カントー地方。どこの街のビルの地下

「? ? ? ?」…………状況は?」

低い。地獄の底から響いてくるかの様な声。

部下? 「はつ! 先程、監視の者から入った連絡によりますと、ター

ゲットは今朝マサラタウンを出発。現在はハナダシティ駅にてトレーナーと思われる仲間二名と合流したとの事です！」

部下と思われる男が軍隊じみた口調で報告を上げる。

「??? 「仲間といふのは?」

部下1 「はつー! ピシティジムリーダー・タケシ、ハナダシティジムリーダー・カスミと思われます!」

「??? 「なるほど。昔のメンツと言つわけか……。監視を続ける。動くのは奴らに隙ができた時だ。その際、他の者は適当に追っ払つておけ。目的はあくまでサトシ君のみだからな。」

部下1 「はつー! では引き続き監視の伝令を送ります!」

「??? 「よし。お前はもう下がれ。次の報告を。」

するとともに一人の部下が前へ出て、先程の部下と同様に軍隊口調で、  
部下2 「はつー! 解析は現在35%完了。このペースでこきますと10日後には完了する予定です。」

「??? 「思つたよりかかつているな。急げ。」

部下2 「はつー! すぐに伝令を!」

バタン..... 部下達が扉を閉める音。  
もう部屋にはボスと思われる男一人しかいない。  
少し手間取つたものの、こちちは近い内にメドがつく  
だろつ.....  
後は.....

「??? 「.....『ワダシ!!』.....か.....」

数日後.....町外れの芝生.....

タケシ「ブースター、戦闘不能！よつて勝者、サトシ！」

サトシ「いよっしゃああああ！！大勝利だぜええええええ！」

カスミ「つづつづつさにわね～」

カントーを回り始めて数日。

サトシはカスミ、タケシと共に相変わらずバトルの日々を送っていた。

そして今日の草試合も見事勝利をおさめた。

トレーナー「ちえ。やつぱ強いなサトシさんば。」

試合相手の少年がブースターをポールに戻しながら言つ。

サトシ「いやあ、俺なんてまだまださ。ワタルさんのカイリューに軽くあしらわれちゃつたし。」

トレーナー「でもあのワタルさん相手にあそこまで戦えたんだ。十分強いよ。」

サトシ「そう?ま、まあ悪い気はしねえなあ～、ハハハ！」

カスミ「すぐ調子乗んだから.....」

サトシとワタルの変則マッチの模様は全国にTV中継されていたので、多くの人がその戦いを見ていた。

同時にサトシの名も自動的に広まって、今ではちょっとした有名人だ。

タケシ「そろそろポケモンセンターに行つた方が良いだろう。ポケモン達も疲れてる。」

サトシ「ああ、そうだな。」

タマムシシティに着いたサトシ達はまっすぐポケモンセンターへ直行、ポケモン達をあずけた。

タケシ「ジョーーーーイさあああつ…………あでつーででー！？カスミ「アンタは変わつてないわよねほんつつとー。」

すぐにカスミに耳を引っ張られるタケシ…………

タケシ「ちょっと…………まだ名前呼んだだけつ…………！」

懐かしいなあ…………

などとサトシは呆れながらそれを見ていたが、

ジョーイ「マサラタウンのサトシさん。フタバタウンのヒカリさんから伝言を預かっています。ソノオタウンのポケモンセンターに連絡が欲しいそうです。」

サトシ「ヒカリが？はい。わかりました。」

カスミ「ヒカリ？前にシンオウと一緒に旅してたっていう子？。」

またもやカスミがニヤニヤしながら囁く。

サトシ「またそれだよ…………。ヒカリは友達！仲間だよー。」

カスミ「じゃあハルカは？」

サトシ「ハルカも同じだ！…と、とにかく、ヒカリに電話しないと

……」

そう言ってＴＶ電話のもとへ向かうサトシ。

カスミ「ふう～ん……（＝ヤリ）」

カスミは見逃さなかつた。

ハルカの事を聞かれた時と、ヒカリの事を聞かれた時の、サトシの微妙な反応の差を

……

## 旅立ちと始まり（後書き）

初めての投稿です！

どこまでやれるかわからせんが頑張ります。

嵐の前の静けさ？

タマムシシティ・ポケモンセンター。

午後5時。

サトシ「よおヒカリ！久しぶりだなあ！」

ヒカリ「サトシ久しぶりー！元気してた？」

サトシはジョーイからの伝言を受け、TV電話でヒカリに電話していた。

ヒカリ「タケシも久しぶりね……あーもしかしてあなたがカスミさん！？わたしヒカリです！よろしくね！」

カスミ「よ、よろしく！」

ヒカリの勢いに珍しくカスミは押され気味だ。

ヒカリ「でもカスミさんって噂どおり美人ねえー！しかもジムリーだーだなんてー女として憧れちゃうー！」

その言葉にカスミはもひーイヤー。

カスミ「そ、それほどでもおーーヒカリつていい子じやなあいサトシイー！」

サトシ「すぐ調子乗るのはどうちだよ……」

カスミ「何か言つた？」

サトシ「や、何もー。といひでヒカリ、俺に何か用か？」

サトシは今の空気が面倒くさいのでさつたと本題に入った。

ヒカリ「あーそうそう！最近ハルカと連絡取れないんだけど、サトシ何か知ってる？」

サトシ「え？ハルカ？いや、特に何も聞いてないけど……えつ、連絡つかないのか？」

ヒカリ「そうなのよ。私が連絡したのは三日前くらいなんだけど、それからいくら電話かけても出ないのよ。」

サトシ「ふうん……。カスミ何か聞いてるか？」

カスミ「いいえ、別に何も聞いてないけど……」

サトシ「タケシは？」

タケシ「いや、俺も別に……」

サトシ「……まつ、あいつのことだ。ケータイの電源消しつぱとかなんじやねえの？それかどっかに落としてるとか。」

カスミ「サトシの中のハルカはよっぽどドジなイメージのね……」  
ヒカリ「そつか……。わかつたわ。とりあえずまた連絡してみる。突然ごめんね。」

ハルカを心配してか、さつきまでの勢いがすっかり無くなってしまつたヒカリ。

さすがにサトシもすぐにフォローする。

サトシ「ま、まあそんな心配すんなって。後で俺がマサトあたりに電話して聞いてみるから。」

ヒカリ「ホント！？ありがとうサトシーわたし、よく考えてみたらハルカの身内の番号知らないから……。でも良かつたわ！何かわかつたら教えてね！」

サトシ「ああ、すぐ連絡するよ。」

パア……と、突然明るくなるヒカリ。

ホント表情豊かだよなヒカリは……

お前は笑顔が一番…………って！何考えてんだ俺！？  
ともあれとりあえず元気になつたヒカリを見て安心したサトシは、  
しばらく雑談を楽しんだ。

ピッ…………TV電話の電源を切る。

ヒカリ「…ふう……」  
ノゾミ「どうだつた？」  
ヒカリ「うん……。サトシ達も何も聞いてないって……。」  
ノゾミ「そう……。」

さつき電話では元気に話していたものの、ヒカリはやはりハルカが心配だった。話している間は気がまぎれていたのだろう。

ノゾミ「どうしたんだろうね？最近コンテストにも全然出でないみたいだし……。」  
ヒカリ「うん……。」

ハルカが最近コンテストに出でていない事は、サトシには言わなかつた。

そこまでは…………何だか言いづらかったからだ。

…………わたし…………クリカツプ以来、ハルカに一度も勝つことないのに…………  
でも…………ハルカがいなくなれば…………樂になる…………？  
前に見たコーディネーターの雑誌にそんな事が書いてあつた。  
「ホウエンの舞姫、戦線離脱！？シンオウの妖精、障害が無くなり  
一歩リードか！？」

勝手なこと書かないでよ。……

だからこそ……越えたいのに……

ノゾミ「ハルカにクリカッPのリベンジしたいんだけどな。……」

ヒカリ「うん。……」

……でも、大丈夫だよね。サトシもマサト君に聞いてくれるつて言つてたし。きっと何か事情があるんだよね。

ヒカリは無理やり気分を切り替えた。

ヒカリ「ハルカなら大丈夫！きっと何か事情があるのよ。」

ノゾミはいきなりヒカリの勢いが戻つたので多少びっくりしたが、すぐに不敵に笑い返した。

ノゾミ「そうだね。それにつまでも引きずつてたら、明日のコンテストにも影響が出る。」

ヒカリ「うん！明日こそ負けないからねノゾミー！」

ノゾミ「その息だよヒカリ。でもまさかアンタに励まされるなんてねえ。」

ヒカリ「ちょっとソレどういう意味よー？」

ソノオタウンのポケモンセンターに、一人の元気な声が響いた。

午後9時30分。

タマムシシティ・タマムシ美術館

美術館付近

？？？「田標に到達。指示を。」

ペペガガガツ…………通信機器の音…………

？？？「よし、では各管理コンピューターにハッキング。完了次第報告せよ。」

？？？「了解。では、ハッキングを開始します。」

ガチャガチャと色々な機器をリュックから取り出す。と同時に、も のすじいスピードでそれらを操作し始める。

風もない静かな夜…………嵐の前の静けさとこいつものだらうか…………

サトシ「修行？」

マサト「うん。3ヶ月くらい前だつたかな？「自分とポケモンの力を高めるために修行するから、しばらく連絡取れなくなる」ついていきなり電話きて。まあサトシがよくやる山籠もりみたいなもんなのかな？」

サトシ「こしてもずいぶん長いな…………」

サトシはさつきヒカリに言った通り、ハルカの事を聞くためマサトに連絡していた。

マサトは今はポケモントレーナーとして各地方をまわっており、今はジョウトにいるらしい。

マサト「それでしばらくなonthestに出れないって言つたけど、まあやつこいつ事だから。つちの姉が心配かけたねえ。」

相変わらず皮肉いつぱいマサトは言つ。

サトシ「ハハハ。まあ別にそんな心配はしてなかつたけどなー。」  
マサト「あらら、お姉ちゃんかわいそつて……」

マサトは向こうにヤーヤーしてくる。

サトシ「まあ、まあよつとは心配したかなあー、ハハ……。じゃああつがとなマサトー・ジム戦がんばれよー！」

と言いつつ内心では結構心配してたサトシ。  
これでひとまず安心だな。

マサト「うんー！サトシになんてすぐ追いつくからねー。」  
サトシ「つたく成長しても生意氣イー。じやなつー。」

ピッ一携帯の電源を切る。

タケシ「何かわかったか？」

サトシ「ああ、何か修行だつて。」  
カスミ「修行？」

サトシはせつときマトから聞いた事をタケシ達にも話した。

タケシ「コンテストにも出ないで特訓だなんて……随分な力の入れようだな…………。」

カスミ「しかも完全にまわりシャットアカウトして3ヶ用も……。どつかの誰かさんに似て行動が突飛ね~。」

カスミがサトシを横目で見ながらわざといいじく叫ぶ。

サトシ「おこソレ俺に言つてんのか?」

カスミ「他に誰がいんのよ。」

カスミの即答にふてくされた様な顔をするサトシ

……くつ。こつちょ前に張り切りやがつて

サトシ「つつおーーーしーー俺も負けてらんねええええーーちょ  
つと外行つてくるーー」

カスミ「えつ！？外つて何、ドコー？」

サトシ「修行だよ修行！大丈夫すぐ帰つてくるからーじゃなつー！」

そう言つてサトシはポケモンセンターから飛び出していくつてしまつた……。

カスミ「ちょっと……ヒカリに連絡するんじや……もー行つ  
ちゃつたし……。」

タケシ「ハハハ……。まあヒカリには俺達で連絡しておこい。」

カスミ「そうね。……にしてもホンッツツ似た者同士……

……。」

夜のタマムシシティに消えていった少年の背中にため息をつくカス

ニであった……。

午前1時

タマムシシティ……………ビルの屋上

? ? ? 「……………」

月も星も雲により身を潜めた夜の闇は、やはり漆黒のロープを纏つたその姿を完全に呑み込んでいた

眼下に見下ろすはタマムシ美術館。

そして……………

サトシ「ふう。けつこー遅くなつちまつたなあ。散歩がてらそろそろ帰るかピカチュウ」

ピカチュウ「ピッカツチュウー！」

肩に黄色いポケモンを乗せて歩く少年

? ? ? 「……………」

闇に紛れた「闇」は、ただただその少年を見つめていた

タマムシ美術館付近。

「ハッキング及び突入準備完了」。いつでもいけます。

「よし、ここからもよく見える。」

先ほど出されていた電子機器の数々はすでに片付けられている。

「では作戦及び目標の再確認を……」

「リーダー。それは必要ありません。時間の無駄です。」

リーダーと呼ばれた男の言葉を遮り、同時に上司に對しては有り得ないであらう言葉を放つ

リーダー?「フツ……そつだつたな。お前は何よりも無駄を嫌うエージェント。そして……」

？？？「どんな任務も無駄なく達成してみせます。」

またもやリーダーの言葉を遮る。

リーダー？「頼もしいな。では、『コードネーム』『ルカ』……」

瞬間、雲が割れ、月光がさす。

リーダー？「…………突入せよ。」

ルカ「了解。」

ピッ…………

リーダー？「ボス、『ルカ』が目標に突入しました。」

？？？「そうか。『ご苦労。お前はもう戻れ。』

リーダー？「はつ。」

どこかの街のどこかの地下…………

現在は部下もおらず、部屋にいるのは「ボス」と呼ばれた彼一人だ。

……『ルカ』に任せておけば、まず間違いなくアレは手に入るだ

る（ひ）…………

残る鍵は…………

「アシド』。』。」

シズ - せつ。

『水の民』の搜索を開始した。

卷之三

ピッ-----通信機器を切る。

カサツ 根にあつた古い文庫を手に取る

「臺灣・桃園市中壢區中壢中正路100號」

？？？「…………必ず…………手に入る…………」

思わず声に出る。それほどまでに手中に収めたい存在。  
ノンノン。ドアをノックする音.....

？？？「入れ。」

ガチャ……ドアが開く。

部下「失礼します。個体02に関する解析について報告いたします。」

L

男の表情が、期待のソレに変わる。

？」  
「……匱乏のう。

部下「……解析は100%完了。 いつでも適合実験に移行可能です。」

？？？「……………」

男の表情が、不敵な笑みに変わる。

????「ただちに開始しろ。」

部下「はっ！」

部下が立ち去るひつとする……………が

????「お前はどう思う。私がこの力を手に入れたとき、私はどのよつな存在になつてゐると思つ。」

突然の言葉に多少戸惑つた部下だが、すぐに表情を戻し答えた。

部下「……………」等しい存在に。」

男の表情が、凶悪な笑みに変わる。

バタン……………ドアが閉まる音。

今度こそ部下が出て行き、再び部屋には男一人となつた。  
だが……………その笑みはいまだ浮かべたまま。  
もつすぐ……………もうすぐだ……  
主人の周りの空気が激変したのに気づき、傍らのペルシアンが顔を上げる。

どこかのマフィアのボスのような出で立つ。

その主人の左胸には「R」のバッジ。

そして、もはや狂氣とも言える表情で、言い放つ。

サカキ「……………私は……………」

風の前の静けさ？（後書き）

サトハル出てくるの結構後になるかも……  
けど、必ず出しますんで！

## 遭遇！バカにされた？

サトシ「ふあ～…、流石に眠くなってきたな…。」

夜もふけてきたので、サトシはバトルの訓練を切り上げ、ついでに散歩をしながらポケモンセンターへ向かっていた。

サトシ「今何時……」ぱつ、もう一時回つてんじやん。やつすぎた……。

流石にこの時間だと肌寒い。散歩をやめ、サトシは身震いしながらポケモンセンターに急ぐ。

サトシ（せういやアイツ……一人で修行してるんだっけ。今頃何やつてんのかな……つて、もう流石に寝てるか。）

歩きながら空を見てみる。月も星も見えない。

（いきなり一人でジョウウトに行くつて言い出した時は、正直びっくりしたな……。）

あの頃は俺だつてまだ一人旅なんてしたことなかつたのに……しかもアイツ女の子だし。ちょっと焦つたつけなあ～。

などと考えて歩いている内に大きなタマムシ美術館が見えてきた。

サトシ「美術館か。昔の俺ならあんま気にかけなかつただろうけど……、明日にでも寄つてみるかな？」

美術館の前を通りすぎる……と思つたのだが、

サトシ「…………ん？」

ふと見ると、夜の美術館に入口から人が一人入っていくのが見えた。  
こんな時間に…………てか、まだ開いてたのか美術館。  
好奇心には勝てず、ついさつきまでポケモンセンターへ向かってい  
たはずの彼の足は、自然と美術館に向かつていた。

サトシ「…………流石に夜中なだけあってちょっと不気味だな…………」  
「…………」

ホールを見渡す。

シン…………と静まり返り、人っ子一人いない。

サトシ「夜の美術館つて結構定番のシチュエーションだよな。」

ちょっと肝試し気分で歩を進める。

カツーーーーン…………カツーーーーン…………

聞こえるのは自分の足音のみ。

よくわからない絵やら銅像やら、ポケモンの化石みたいのやらが沢山展示してある。

てかこれって不法侵入？いや、だつて入口開いてたし…………誰

にも見つかってないし…………大丈夫だよな？

全然ダイジョバナイのだが、残念ながら彼の常識の中では大丈夫ら  
しい。

しかし、そんなサトシはふと疑問に思った。

サトシ「…………誰にも…………見つかってない？」

いや…………見つける側の人がいない？

ここまで割と色んな場所に行つたが、それまでの間人という人を見

ていな。

サトシ「警備員とかいないのか…………？いや、そんなことないよな

…………」

そういうや入り口にも見張りとかいなかつたな…………見たといつたらセツキ入口から入つていつた人…………

サトシ「…………！」

そこ今まで考えてやつと想い至つた。

まさか…………！？

そう思つた瞬間、彼の視界に人影らしきものが入つた。ただし…………

サトシ「なつ…………だ、大丈夫ですか！？」

部屋の隅に、警備員らしき人物が倒れていた。

呼んでもゆすつても反応がない。気絶しているようだ。

サトシ「くつ…………！とつあえず救急車と警察を…………」

…………

今が異常事態であることに気づいたサトシは自分の携帯に手を伸ば

す…………が

サトシ「…………何で！？何でつながらないんだよ！？」

焦りとイラつきで思わず叫ぶ。何故か携帯がつながらない。ちくしょう！…………だから誰もいなかつたのかよ！？

恐らういなかつたのではなく、見なかつた。ここにいる警備員と同じく、皆氣絶させられ、どこかへおいやられているのだ。

この分だと、監視カメラなどの警備システムも全く機能していないだろ？……

サトシ「人を呼びに行くか…………！？」でも、その間に逃げられちまうかも…………」

焦りだけがつのる…………が、

ふと、奥の曲がり角から人影が出てきたのが見えた。

サトシ「あ…………待てっ…………」

ほぼ反射的に体が動いた。向こうの人の影もサトシに気づいたらしく、走り出した。

間違いない…………泥棒だ！

ダダダダダダダダ！……と、夜の美術館を走り回る。

身体能力には自信があつたサトシだが、向こうも相当らしい。かなり早く、隙をついて死角に回り込まれてしまつ。

サトシ「くつ…………こくなつたらー！ピカチュウ！アイツに10万

……はマズいか。でんじはだ！……」

ピカチュウ「ピカ～チュウッ！……」

ビシイ！……と、夜の美術館に雷電が进る…………が

？？？「…………！」

ヒヨイツ

なんと犯人は、かなり速度があるはずの攻撃を、意図もたやすくか

わしてみせた。

サトシ「なつ……………？」

何だアイツ！？あんなの俺でも難しいってのー。と負けず嫌いの彼は思つてしまつ。普通はできないと思つんだけどなあ…………。

サトシ「っくしょーーー！」なつたら挟み撃ち作戦だー・ピカチュウ！-「うそくこぢうで前に回り込めーーー！」

ピカチュウ「ピッカアーーー！」

ビュンッ！ーと、凄まじいスピードで前へ突っ込むピカチュウ。

？？？「……………！」

ピカチュウがヤツを追い抜く！

そう思つた瞬間、

ドカアツ！ーと、ピカチュウが不意に何者かに吹き飛ばされる。

サトシ「ピカチュウーーー！」

何とかピカチュウをキャッチするサトシ。幸い大したダメージではないらしく、すぐに地面に飛び降りる。

サトシ「つてアイツはーーー？」

慌てて周りを見渡すも、すでに犯人の姿はなかつた。

サトシ「くそつ……………逃がしたかーーー？」

ルカ（何故人が中に…………！？）

美術館・資料展示室奥。

そこでは先程の犯人…………ルカが何か手元の機器を操っている。  
まあいい。任務には大して支障はない…………

カタカタカタカ…………ピピッ！…………カチャッ…………  
どうやら保管ケースのロックを解除したようだ。

ギィ…………ケースを開け、中の物を取る。

ルカ（…………こんな物が…………神に近づく鍵になるとはな…………）

ソレをポーチにしまい込み、部屋を出ようと振り返った瞬間、

サトシ「見つけたぞ……」

ルカ「…………」

息を切らしながら、先ほどの少年と黄色いポケモンが入口に立つて  
いた。

サトシ「そのポーチを渡せ……」

ルカ「…………」

何も言わない犯人……………  
ん？よく見たらコイツ……………女か？

後ろで一つに束ねてある深い茶色の髪。  
身体のラインがくつきり解る、ピチッとした黒い特殊スーツ（？）  
みたいなのに身を包んでいる。ほら……………キャツ　アイみたいなあの

等と考えていると……………

クルツと、ルカが後ろの窓の方へ向く！

その瞬間！

ビシイ！…と、窓が凍りつく。

ルカ「……………！」

サトシ「つへー！お前の魂胆なんて見え見えだぜ。窓から逃げようとしたら冷凍ビームで凍らせろって、前もって指示を出したといたのさ！」

そつ自信満々に叫ぶ少年の傍らにはオーラーが君臨している。

サトシ「ああ、もう逃げ場はないぞ泥棒！」

他に窓も無く、出口もひとつしかない。確かに逃げ場はなさそうだ。  
だが、

ルカ「……………私が他に手をうつてないと思つか？」

サトシ「え？」

瞬間、

ピカチュウ「ピカピー！」

バシイツ！！

サトシ「うわっ！？」

間一髪、ピカチュウが後ろの気配に気づき、サトシに攻撃を加えられる前にアイアンテールで遮つた。

マニユーラ「…………！」

サトシ「マニユーラ！？」って、あつ…………？」

だがその一瞬の隙をついて、ルカがサトシとピカチュウとオーネゴーリの間を縫うようにすり抜けていった。

サトシ「しま…………！待てっ！…………！」

必死に追うも、既に犯人は入口の手前まで迫っていた。  
なんて速さだ…………

ルカが美術館の外へ出る。  
が、

？？？「そこまでだ…………！」

突然、サトシの聞き慣れた声が響いた。入口の方を見てみる。

ルカ「な…………！？」

タケシ「サトシ！大丈夫か！？」  
カスミ「つたく、なかなか帰つてこないと戻つたら…………やつぱ面  
倒に巻き込まれてんじゃない！」

ジュンサー「それを返しなさい！あなたを現行犯で逮捕します！」

そこにはタケシ、カスミ、そしてジュンサーら数人が立ちふさがっていた。

ジュンサー「包囲！！」

ズカズカズカ！！

一瞬で数人の警官が犯人の周りを固めた。

ルカ「ぐ…………！？」

サトシ「な…………何で…………？」

一人だけ状況が掴めないサトシ。するとカスミがため息をはきながら説明を始めた。

カスミ「アンタがいつまでたっても帰つてこないから、心配になつてアタシ達が探しに行つたら、美術館で倒れてる人を見つけたのよ。んで、ただ事じやないと思つて通報したの。」

サトシ「で、でも携帯繫がらなかつたのに…………」

タケシ「確かに美術館の近くでは繫がらなかつたが、少し離れれば問題なく通じたんだよ。」

ジュンサー「恐らく何らかの方法を使って、美術館付近にのみ妨害電波を張つたんでしょうね。周りに怪しまれないように。おまけに美術館の警備システムも全てハッキングされぱ…………。サトシ君が引っ搔き回してくれなかつたらきつと取り逃がしてたわ。」

サトシはポカーンとする。

ま、まあとりあえず…………結果オーライってやつ？

ルカ「く…………！」

ジュンサー「確保つ……！」

警官達が一斉にルカに飛びかかる！  
その瞬間！

「ゴオ！……と、

辺りが一瞬で炎に包まれる。

ルカ「！……？」

サトシ「つっつっつーーー？」

ジュンサー「キヤッ…………！」

炎が沈み、サトシ達の視界が回復する…………が、

そこにはもう既にルカの姿はなかつた

ジュンサー「くつー逃げられ…………！」

そして、その代わりに

「…………」

バタバタ…………黒いローブがはためく

サトシ「…………え…………？」

カスミ「だ……誰…………？」

後ろから射し込む満月の光が、そのシルエットをかるうじて浮かび  
上がらせる…………

いつの間にか目の前の美術館の屋根の上には、漆黒の人物とポケモ

ンが立っていた.....

タケシ「敵の新手か.....！」にしても.....！」

タケシは謎の人物の傍らに立つポケモンに目をやる。

ポケモン「.....」

既にブリーダーとしてはトップクラスの実力を持つタケシ。  
だからこそ、わかる。

あのポケモン.....かなり育てられている.....！  
バックから射し込む月光のおかげでどのポケモンまでは見分けられなかつたが、発せられる雰囲気というか、気配といったものがそれを物語つていた。

ジュンサー「もしものために保険を掛けてたってわけね.....！こうなつたらあなただけでも公務執行妨害で逮捕します！－ウインディイ！！」

ウインディイ「ガウ！」

サトシ「ピカチュウ！お前も行け！」  
カスミ「行きなさい！マイステディ！」  
タケシ「グレッグル！」

ウインディイ、ピカチュウ、スター三三、グレッグルが突撃する。  
だが、

？？？『炎の渦。』

機械じみた、低い声が静かに響く。  
その瞬間、

「オオ……と、またもや炎の龍巻がサトシ達を襲つ。

サトシ「うわっ……」

ポケモン達も、その凄まじい熱風の前に成す術もなく立ち止まつてしまつ。

「オオオオ……燃え盛る炎。

その向こうにたたずむ漆黒の人物を、サトシは何とか視界に入れる。

サトシ「く……お前は……一体……」

「何者だ!?」と言葉を続けよひとするサトシ……が、

「? ? ? ? ?」

ギン……

サトシ「ウッ……!?

「オオオ

炎の熱氣でその姿が揺らいでいる

顔は頭からかぶつたフードの闇で見えないのだが、何故か一瞬睨まれた気がした。

「? ? ? ? ?」

瞬間、

フツ……と、

漆黒の人物とそのポケモンは……その場から消えた

ジュンサー「あつ……し、しまつた!!」  
カスミ「逃げられたわね……」

炎は既におさまっており、まるで何事も無かつたかの様に、辺りに再び夜の静寂が戻る。

ジュンサー「まだ近くにいるかもしない!すぐに防衛線を張つて!」

ジュンサーが部下の警官達に指示を送った。  
警官達が慌ただしく動いている……

タケシ「何だつたんだアイツは……」

そんな中サトシ達はしばらく呆氣にとらわれていた……が、

サトシ「…………」  
タケシ「…………?サトシ…………?」

サトシはしばらく美術館の屋根の上を睨んでいた。

「何だ…………?何かしらないけど…………」

サトシ「…………めっちゃくちゃ悔しい。」  
タケシ「まあ、逃がしちゃったしな。」  
サトシ「それもあるけど…………何か…………バカにされたって言つた…………。」  
カスミ「は?」

「何言つてんのハイジ?」といった風な顔でサトシを見るカスミ。

サトシ「……後一步の所まで追いつめたのに、後から来た訳わから  
ないヤツに邪魔されて……、で、何もできないまま結局どっちにも  
逃げられて……」

何より、あの時一瞬でも怯んでしまったのが悔しい。あの時の自分  
はまだ元気、「蛇に睨まれた蛙」状態だった。

サトシ「……我ながらみつともないぜ……。」

グ……と、サトシは拳を握りしめた。

## 異変…………そして意外！？

ザワザワザワ…………

風で木々が揺れる音が静かに響く…………  
この時期にしては珍しい程の日射しも、生い茂る枝葉によつて遮られあまり気にならない。

ここは一言でいうと、森だ。

樹齢千年を超えるであろう巨大な樹木。あまりにも透き通つた川。まるで違う世界にでもいるかの様な錯覚を覚える程の、広大無辺な場所。

そしてそんな中、明らかに浮いている人物が一人…………

ハルカ「ふう。これくらいにしどこうか…………。」

コンテストも休み、ただいま音信不通状態のハルカがポケモン達に言つ。

その言葉にバシャーモ等ハルカの手持ち達は技の構えを解き、主人の元へ集まつた。

ハルカ「みんなお疲れ様。はい、ご褒美。」

そう微笑みながらポロツクをポケモン達に与える。ポリポリと、嬉しそうに食べているバシャーモ達。

ハルカはその光景を見ながらしばし物思いにふけつた。

……しばらくコンテストも出でないなあ…………きっと腕も鈍つてるかも…………

シユウやサオリさん…………ハーリーさん…………ヒカリにもサトシとかにも最近会つてないし…………

ハルカ「…………サトシ…………か…………」

ハルカの脳裏にかつてホウエン、カントーを共に旅した帽子の少年が浮かぶ。

もしサトシに会つていなかつたら…………きっと自分は「ヨーティネーターになつていなかつただろう…………それどころかポケモン達と触れ合う事もなかつたかもしれない…………。

ハルカ（…………今じゃ信じられないかも。）

もしもの事を考えると急におかしくなつて思わず笑つてしまつハルカ。…………だがすぐに、ハア…………とため息をつく。

会いたいな

皆に

それに

答えも出さないと

ふと、そんな事を思う。だがまたすぐに気を切り替え、

ハルカ（ダメダメ！私は強くなるつて決めたんだから…………それまでは余計な事考えちゃダメ！我慢よ我慢…………！）

バシャーモ「シャモシャ…………？」

しばらく黙り込んでいたハルカを心配してか、バシャーモがかがんでのぞき込んできた。

見るともう全員がすでにポロツクを食べ終えてハルカの方を見ていた。

ハルカ「ああゴメンゴメン！何でもないのよーちょっと考え事してただけかも。」

ハルカは慌てて表情を直した。今私どんな顔してたんだろ…………？

ハルカ「つていうか遅いなああの人……」

ハルカは今ある人と待ち合わせをしていた。

普通はこんな所で人と待ち合わせなどしないだろうが、ハルカはコーディネーターとして大分顔が知られてしまっているため、人とゆっくり話したい時はこういった人気の無い所の方が良かつたのだ。それでも極端な気はするけど……。

しかし肝心の相手がなかなか来ない……。また特訓再開しようかな？……いや、自分もポケモン達もお腹すいてきたし……

ハルカ「ううん……しようがないから先にお皿にしちゃ……」

？？？「よお！待たせちゃったかい？」

ハルカ「……いきなり背後から現れるのはやめてもらりますか？」

いつの間にやらハルカの後ろにはニヤニヤ顔を浮かべた金髪の男が立っていた。ハルカが待っていた人物だ。

一言でいうと……チャラい。

と言つても服装や見た目などはそんなでもないのだが、しゃべり方とか雰囲気がチャラい。

？？？「そんな顔すんなよおー！別にやましい事は考えてねえんだし。ま、もうちょいしたら考える予定なんで、よろしくな。」

ハルカ「何が？」

ハルカはこの男に会つてから浮かべている呆れ顔をさらに強く浮かべた。

確かにイケメンだけど……中身とのギャップありすぎかも……

……同じイケメンならやっぱショウの方が……

だがハルカはそこで考えるのをやめ、はかば強引に話を切り替えた。

ハルカ「ツツツ…………もつつ！それより本題に入りましょーよ本題に！私は忙しいんですうつ……」

「…………なーにが忙しいだよ話変える口実のくせにい。お前は今まで言つアレだ……ツンデレだな！」

ハルカ「…………川に沈めてやろうかしら。」

「…………わ、わかった……！わかったから真顔でポケモンつくれてくるのはやめろ……！」

ギャーギャー響き渡る声は、神祕的な場所にいるこの一人をぞうに浮かび上がらせていた…………。

タマムシシティ・ポケモンセンター。

サトシ達はポケモンセンターの食堂で朝食をとつていた。備え付けのTVでは朝のニュース番組が流れている。

キヤスター「では次のニュースです。最近深刻化している各地の干ばつ被害について、政府は昨日、特別対策案をまとめの方針を伝えました。この特別対策案は……」

タケシ「干ばつか……。温暖化というやつか？」「カスミ「水ポケモン達への影響が心配ね……。」

広範囲に及ぶ原因不明の干ばつ被害。

数年前から目立つた被害が出始め、各地の人々は言い知れぬ不安にかられていた。

サトシ「……何か、あの時を思い出すな…………。」

タケシ「あの時？」

サトシ「ほら……ホウエンのグラードンとカイオーガの戦い。」

カスミ「ああ、アレね。私もテレビで見たわ。凄かつたらしいわね……。」

サトシはかつて関わった伝説ポケモンの戦いを思い出す。

大陸ポケモン、グラードン。そして海底ポケモン、カイオーガ。約六年前、サトシ達はその一匹を手中におさめ世界征服をもくろんでいた組織、マグマ団とアクア団に遭遇した。

しかしじどちらもグラードンとカイオーガの人智を超えた力に愕然とし、結局その一匹を操ることを諦め解散。彼らの野望は泡と消えた。

サトシ「……あの時はカイオーガが暴走して大雨降らせて大変だったけど……今度は干ばつか…………。」

カスミ「……まさかまたマグマ団とかいう奴らが復活して……？」

タケシ「いや、それはないだろう。奴らは完全にグラードンとカイオーガを操るのを諦めていた。」

サトシ達がそんな事を考えていると、番組のニュースが切り替わった。

キヤスター「次のニュースです。先日カントー地方のタマムシシティ・タマムシ美術館で強盗事件が発生し、古代ポケモンに関する資料一点が盗まれました。タマムシ美術館はカントーでは随一の規模を誇り……」

サトシ「あ、美術館映つてる。」

テレビにはタマムシ美術館の前でインタビューを受ける美術館の館長が映し出されている。

館長「あれは先日見つけたばかりで、研究が進めば新たなポケモンの存在が判明するかもしれないとしても貴重な物でした。一刻も早く……」

タケシ「そんな貴重な物を盗まれたのか……。」

カスミ「あれから何日か経つたけど、結局何も掴めてないってジュンサーさん言つてたわね。」

サトシ「しつかし何でこう俺達は毎度面倒に巻き込まれるんだ?」

カスミ「達じやなくて「俺」ね「俺」。」

サトシ「まるで俺が面倒持ち込んできたみたいな言い方だな……。」

カスミ「そう言つたんだけど?」

サトシは何やらブツブツと文句を言いながら食堂のカウンターへ食器を下げる行つた。すると、

ブーツ　　ブーツ　　と、彼の携帯が震えた。

サトシ「ん?メール　　誰だ　　?」

ディスプレイには「ヒカリ」と記されていた。

ヒカリ

サトシ久しぶり!元気してた!?

何でいきなりメールしたかというと……何とあたし、今カントーにいるのでーす!ノゾミも一緒だよ(　　\*)

それで久しぶりに会えないかなと思つてメールしました!

お返事待つてま～す！

思わずサトシの顔がほころんだ。

後日、午前11時。

ヤマブキシティの公園。

ヒカリ「サトシ～！タケシ～！」

噴水の向こう側から一ネット帽をかぶったヒカリが走ってくる。その後をノゾミがゆっくり歩いている。

サトシ「おおヒカリ！久しぶりだなあ～！ノゾミも大きくなつたな～！」

ノゾミ「アタシは子供かい……。」

サトシ達は断る理由も無いので、後田ヒカリ達と公園で待ち合わせて久しぶりに遊ぼうということになつた。

ヒカリ「あ～！カスミさん直接会うのは初めてですね～！？わたしヒカリです！こつちは友達兼ライバルのノゾミ～。よろしくお願ひしま～す！」

ノゾミ「よろしく。カスミさんはジムリーダーなんだよね？今度バトルしたいな。」

カスミ「よろしくね。それと一人とも、アタシのことはカスミで良いから。さん付けってちょっと苦手なのよね～。」

ヒカリ「じゃあカスミは彼氏いるの！？」

カスミ「ヒカリ……何が「じゃあ」なのかしら……」

楽しそうに話すガールズ三人に軽く嫉妬（？）したサトシはすかさず話題を振った。

サトシ「でも一人とも何でカントーに？」  
ヒカリ「ふつふつふう。それはね…………」

「アレー」と指差しながらヒカリは言つ。その先を見てみると、何やらデパートにポスターが張つてあるのが見えた。どうやら「コンテストの張り紙らしい。

ヒカリ「明後日に開かれるここの「コンテストに出るために来たの。でもただのコンテストじゃないのよ～？何とあのミクリ様が主催者として審査員に加わるんですって！」

やや興奮気味にヒカリが説明する。へえ～、前にシンオウでやつたミクリカップみたいなもんか…………  
しかし以外にもカスミがこの話に食いついてきた。

カスミ「えつ～？ミクリさんここに来るの～？えつ……マジ～？」  
タケシ「ずいぶん嬉しそうだな。」

カスミ「そりやそうよ～！だつてアタシ、ミクリさんの大ファンだもの～！」

サトシ「そりだつたのか。まあミクリさんと言えば、ホウエンの「チャンピオン」にして、「コンテストマスター」にして、「水ポケモンマスター」の超スーパーな人だもんな。」

おまけに超イケメンだし。全国の女性の憧れの的であるとともに、

全国の男性の嫉妬の対象……なんだろうな……。  
まさに「全てを持っている男」。それがミクリなのだ。

カスミ「決めた！アタシもそのコンテスト出るわ！…」

サトシ「へえ～そうなんだ………つては？」

カスミ「だから～アタシもヒカリ達と一緒にこのコンテスト出るつて言ってんの！」

シン……瞬の沈黙……

サトシ「ええええええええ～！～～～～～力、カスミがコンテストだとおおおおおお～！？」

突然のカスミの宣言に流石のヒカリとノゾミも目を見開いている。

タケシ「おいおい本気かカスミ？これにはヒカリもノゾミも出るんだぞ？熟練の二人相手にシロウト同然のお前に勝ち目は……」

カスミ「勝敗はどーでも良いのつ～とにかくこれは、憧れのミクリさんにアタシの存在をアピールするチャンスよ～！」

サトシ「アピールしすぎて逆に引かれるんじゃないか……ぐふつ～？」

カスミのハイキックがサトシの腰にクリーンヒットした。効果は抜群だ。

カスミ「さあて、そうと決まればさっそくコンテストパスの発行よ！ヒカリ！ノゾミ！パスの作り方教えて！」

ヒカリ&ノゾミ「ハ…ハイイ～！」

サトシが撃沈されるのを目の前で見ていた二人は、冷や汗をかきな

がら元気に返事をする。

カスミ等三人は物凄い勢いでその場を離れて行つた。

タケシ「…………」いや面白い事にならうだなサトシ。お前も出てみたらどうだ?」

サトシは先程のダメージに未だしづくまつたままだ。

サトシ「絶対イヤだね…………。アイツより立つたら俺もつ多分この世にいない…………」

ハア…………一體どうなることやら…………。

## 失礼のないよひこ

ヤママブキシティ・コンテスト会場前

カスミ「コンテストバスも作つたし、エントリーも完了!…」これで準備万端ね!…

コンテスト当日。

エントリーを終えたヒカリ、ノゾミ、そしてカスミが会場の受付から戻ってきた。

会場前の広場にはエントリーを終えた人や観客がすでに集まりはじめている。今回はミクリが主催者および審査員を勤めるとだけあって、出場者も観客もすごい数だ。

サトシ「なあおい、マジで出んのかカスミ!…?」

カスミ「文句あんの?」

サトシ「いえ、ありません……。」

コンテスト開始約2時間前。

さつきからこの様なやり取りが続いている……。

タケシ「それにしても、今回はミクリさんが審査員を務めるだけあって周りも気合い十分つて感じだな。」

サトシ「ああ。みんな燃えてるな!」

ヒカリ「ノゾミ!…絶対負けないからね!…」

ノゾミ「ああ。でもリボンは私がもううよ?」

サトシ「おおつ、こっちも燃えてるな!…」

カスミ「ミクリ様!必ずあなたを振り向かせて見せます!…!」

違う意味で燃えてる人一名

タケシ「まあカスミはともかく、ここにハルカが居れば、シンオウのミクリカップの完全再現になつたんだけどな。」

サトシ「そういやそうだな。」

ミクリカップか…………懐かしいな

ハルカとヒカリのバトル…………俺は結局最後までどっちを応援するか決められなかつたんだっけ…………  
でもアイツは…………

サトシ「…………ん？あれば…………」

タケシ「どうしたサトシ？」

サトシの視線の先に目を向けるタケシ。そこには何やら沢山の人だからりができていた（といつても殆どが女の子だったが）。

よく聞いていると「キヤー！ウソ本物！？」とか、「かつこいい！こつち向いて～シユウ様あ～！」などと女の子達の悲鳴に近い声が聞こえてくる。

…………ん？シユウ様…………？

シユウ「ありがとうござります。ハイ、これで良いかな？」

ファン「あ、あああああありがとうござります！～！」

差し出された色紙にサインして女の子に返す美少年。その人だからの中にはまさしく、笑顔でファンの女の子達に応えているシユウの姿があった。

タケシ「何でアイツばかりいつもモテるんだ…………」

サトシ「まあ生まれ持つた才能の差じゃね？あ～いシユウ～～！」

タケシを適当にあしらうシユウを呼ぶサトシ。シユウはその声に気づき、ファン達に「また今度ね」と一言をえて、さうに歩いてきた。

シユウ「やあ。久し振りだね。」

サトシ「久し振りだな。元気だつたか?」

「アーティストの道」

ファン達はシユウとサトシ達が親しげに話す所を見てバツの悪そ  
な顔をして離れていった……。

シユウ「…と、そちらはヒカリさんとノゾミさん、それにハナダジムのジムリーダーのカスミさんだね。初めまして。シユウと申します。」

「そう言って微笑みながら会釈するショウ。その瞬間周りから「ハウツー」という女の子らしき声が聞こえたとか……」。

カスミ「カスミよ。よろし……」

ヒカリがいきなりカスミを押しのけて前へ出る。

ヒカリ「は、ははははは初めまして！ シュウさんですよね！？」

シユウーああ、そうだけば……

サトシ「おいおいヒカリ何だそのテンパリ振りは?」

ヒカリ「だ、だつてシユウさんと言つたらコンテスト界では知らない人がいるくらい超有名人じゃない！？ってかサトシ、シユウさんと知り合いだつたの！？何で教えてくれなかつたのよ～！」

サトシ「何でつて言われても……。」

興奮するヒカリをよそに、今度はノゾミが前に出てシユウに握手を求めた。

ノゾミ「ノゾミと言います。会えて光榮ですシユウさん。」

シユウ「よろしく。そう言つてもうれしょ。」

そつ言つて握手をするノゾミとシユウ。

サトシ「お前もここのコンテストに出るのか？」

ヒカリ「サ……サトシ、シユウさんに何で口の聞き方……」

シユウ「いや、僕は今回は出ないが、ミクリさんが主催するコンテストだからね。観戦に来たと言つわけさ。」

サトシ「へえ、珍しいな。お前が出ないなんて。」

シユウは何故か一瞬表情が暗くなつたがすぐに笑顔で、

シユウ「フッ…。たまには観戦でもして色々学ぼうかと思つただけさ。」

サトシ「ふうん。良かつたなあカスミ。強敵が一人減つて。」

サトシがふざけてカスミに言つ。その瞬間カスミはサトシを思い切り睨みつけた……。

シユウ「ん? カスミさんもコンテストに?」

カスミ「まあね。でも私の目的はあくまでミクリさんだけ。」

シユウ「…………そなんですか。観客席から応援しています。それじゃ僕はこれで。」

と、ショウがいつものように左手をポケットに突っ込み、右手を上げながら背を向けて立ち去る。が、

サトシ「やつこやショウ。ハルカの事聞いたか？」

サトシがショウを呼び止めた。

ショウは一瞬ピクッと動いて、

ショウ「…………ああ。何でも集中特訓しているらしいね。」

いつもより少しだけ低い声で答えた。

サトシ「らしいな。しかしアイツも良くやるよなあ。コンテストも休んで、しかも周囲を完全シャットアウトしてだぜ？」

ショウは黙つて聞いている。

サトシ「俺でもそんなんやつたことねえっての。つたへいつまで潜つてるつもりなんだか。」

ショウ「ああ……そうだね……。」

ショウの様子には田もくれず一人話し続けるサトシ。

サトシ「ま、でも出てくれるのが楽しみだけどなー。そしたら即バトル申し込んで……」

ショウ「すまない急いでるんだ。じゃ。」

ショウは突然サトシの言葉を遮り、そのまま去つて行ってしまった

。

サトシは怪訝な顔をしながらショウの背中を見る。

サトシ「…………なーんだアイツ？観戦するなら一緒にいくと思つてたのに…………。」

タケシ「確かに少し様子が変だつたな…………。」

カスミ「わかつてないわねえ～あんたら。」

カスミが得意げに一人に言つた。

サトシ「は？ どうじうことだよ？」

カスミ「まあアンタに説明してもわからんないでしょ？ うね。」

ヒカリ「えつ？ まさかカスミ…………ええ！ ？」

ノゾミ「へえ。まさかあの二人がねえ～。」

ヒカリとノゾミはカスミが言わんとしている事に気がついたようで、ノゾミに至つてはニンマリしている。

サトシ「なんだよ…………。俺だけカヤの外かよ…………。」

ヒカリ「ああ～シユウさんにサインもらえば良かつたあ～…………。」

ノゾミ「追いかければまだ間に合うんじゃない？」

ヒカリ「いや…………今の空氣じゃ行きづらいつて…………。」

カスミ「でもこれは面白いドラマが見れそうねえ～。」

カスミがサトシを横目で見ながら誰にも聞こえないように呟いた。

タケシ「つと二人とも、コンテストの事忘れてないか？」

ヒカリ「あーもうこんな時間！？ 最後の調整しなきや～！」

ノゾミ「突然のイベントにうつかりしてたね…………。」

カスミ「そうだ！ アタシもミクリさんにアピールしなきやいけないんだつた！」

そう言ってヒカリ、ノゾミ、カスミの三人は広場の方へ散らばっていった……

タケシ「じゃあ俺達も会場に入るか。」

サトシ「そうだな。にしてもカスミのヤツ、俺を子供扱いしやがつて……」

サトシは何やらブツブツ文句をたれながらも会場内へ入っていく。

タケシ（……や～てサトシ、いよいよ本氣でウカウカしてられないぞ？）

タケシもまたサトシの後を追つて会場内へと向かった。

シユウはコンテスト会場には入らず、一人道端を歩いていた。

13時45分…………あと15分程度でコンテストが始まる。そろそろ戻らなくては……

しかし、シユウの足取りは重い。

さつきは適当な事を言つて何とか誤魔化した…………いや、嘘ではなかつたのかもしれないが…………

シユウはこれまでコンテストといつもコンテストには積極的に出場していた。しかし最近は全く出でていないという訳ではないのだが、その頻度は落ちていた。

別にコンテストが嫌いになつた訳でも、スランプに陥つてゐる訳でない。

ただ……『ひに』もコンテスト会場を前にするとハルカの事を思い出してしまう。

少し前までであれば特段それは問題ではなかつたのだが……

数ヶ月前、ハルカから突然きた電話。

シユウ「修行?」

ハルカ「うん。しばらくコンテストも休むわ。それと多分、連絡もあまり取れなくなると思う。」

シユウ「それは随時な力の入れようだね。」

ハルカ「まあね。今の自分のまじや駄目だと思つて。だからちよつとの間音信不通になると想つけど、心配しないでね。」

電話越しのハルカの声はどこか寂しそうで、しかし決意に満ちたものだった。

シユウ「わかつた。ちゃんと三食とるんだよ?」

ハルカ「だ、だから心配しないでつてば! つてゆーか子供扱いしないでほしいかも!」

シユウ「ハハハ。冗談さ。」

ハルカ「…………それと…………」の前の事なんだけど……

……

さつきまでの勢いはどこへやら。ハルカは急にモモモモモと叫びながら口に口じりもつた。

シユウ「…………いいよ。」

ハルカ「え?」

シユウ「急いで答えを出さなくてもいい」と。じっくり考えて答えてもらわないと意味はないからね。」

もうわかると思うが、先日シユウはハルカに思い切って告白した。しかしハルカはまだ戸惑っていた様で、すぐに返事をくれなかつた。そして今の状況に至る。

三  
ハルカ「で、でも……さつきも言つたけど、私これからしばらく…

シユウ「待つよ。それからでも構わない。君がちゃんと答えを見つけられるまで、僕は待つから。」

うう。どんな答えでも…………ね

「……………わかつたわ。そういう事なら……………今は

シユウ「ああ。じつくり考えてくれ。」「

そうは言つたものの…………あれからはや3ヶ月。どうにも気になつてコンテストにも集中できない。シユウにとつては一大決心の告白だったのでなおさらだ。

何度も電話してみようという衝動にかられたが、あの時の真剣なハルカの声を思い出し、邪魔してはいけないとなんとか我慢した。今日ここに来たのだって、もしかしたら彼女もこのコンテストに出場しているかもしれないという希望があつたからだ。

ショウ「ふう……。そろそろ僕も気持ちを切り替えないと……。」

ワアアアアアアアアアアアア

会場から歓声、うらしきものが聞こえてくる。……………コンテストが始まったのだろう。

ショウ「……………」

『待つててショウ。必ずもつともつと強くなつて戻つてくるからー。』

ショウ（……………僕も頑張らないと、君が強くなつて戻つてきた時、失礼だからね。）

フツ……………と、不敵に笑う。

そして……………例えどんな答えでも……………僕は誠心誠意、君の想いを受け止めるよ……………

ショウはゆっくりと会場へ向かって歩き出した。

## カスミ、コンテストデビュー！？

司会「さあ～やつてまいりましたポケモンコンテスト・ヤマブキ大会！今大会は何と！あの「コンテストマスター」……ミクリさんが審査員を務めてくれるぞ！？」

ワアアアアアアアアアアア  
鼓膜が破れそうになる程の歓声が場内を包む。

サトシ「ツツツツ！」「すげえ」通り越してうつせえ！－タケシ「グランドフェスティバル並みの盛り上がりだなあ！－」

サトシ達の話し声も自然と大きくなる。そうしないと周りの歓声に  
書き消されてしまうからだ。

ステージではミクリが何やら挨拶をしている。

サトシのすぐ横の女の子達が騒いでいる。辺りを見てみると、ミクリの姿が印刷されたウチワやら手作りらしき旗やらを持つた女の子達が沢山いた。

サトシ「シユウも」んな風になるのかな.....」

タケシ「や、もうなつてるがな。…………うぐう～…海しじ～…」

サエシ「やあ、ヤシコ君は来てんのかな?」  
タケシ「さあ、どこかにいるんじゃないかな?」

サトシは会場を見渡してシユウを探してみるも、人でごった返している中では見つかるわけもなく、すぐに諦めた。

さつきはアッ、何か様子が変だつたけど

流石は司会のプロ。会場を盛り上げるのはお手の物。

シルバーライン

シユウは客席には座らずに、入り口付近の壁にもたれかけて見てい  
た。

司会「では早速まいりましょう！第一審査、トップバッターは何と！ジムリーダー界からのスペシャルゲスト、世界の美少女カスミさんの登場だ！！」

ワアアアアアアアアアアア  
スポットライトがステージに当たる。

するとカスミが意気揚々と中央に歩い

満面の笑み……………それを向ける方向はただ一点

ミクリ 「…………

審査員席に座るミクリは笑顔でカスミを見つめている。

カスミ「ミクリさんが…………ミクリさんがアタシに微笑んでくれてる……ああ～もうこれで満足かも……………」

サトシ「くつ。「世界の美少女」だって。『水ポケモンマスター』の称号は封印か？」

タケシ「流石にミクリさんの前でソレは言えないだろ？」

「サトシ」「こじてもアソイツ…………ミクリさん見すがれ…………。」

観客席からでもわかる…………早く演技しろよ…………

カスミ「ミクリさん…………しつかり見ててくださいね！行くわよー！マイステティー！」

ボン～！ボールから現れたのは…………ミクロトノだ。

司会「カスミさんのパートナーはやはり水ポケモン――ミクロトノがキューートで登場です！」

サトシ「一回萝卜つかう」

タケシ「ああ～どんなステージになるかな？」

カスミ「行くわよニヨロトノ！周囲にバブルこうせえ〜ん！！」

ド パ パ パ パ パ ! !

一ヨロトノが辺りにバブルこうせんを撒き散らす。

カスミ「そこでサイコキネシスうううう！」

ビタア！…と、撒き散らされたバブルーのせんがサイコキネシスで空中に止まる。

司会「カスミさん！バブルこうせんにサイコキネシスのグラデーション

からどう運ぶのか！？

דעתם נרנברג

サトシ「何でそんなのばすの?」

カスミが両手を上げ空を仰ぐ様に指示する。一ヨロトノの動きもシンクロしている。

すると頭上に雨雲が現れ、

中の泡を打ち、  
静かに雨を降りす、  
と同時に、  
その雨粒が空

司会「これは何と！空中のピンク色の泡が雨により割られ、ステージ全体に幻想的な水しぶきを広げました！！」

コンテスト「流石はハナダシティジムリーダー。水の美しさを存分にアピールしたステージでしたね。」

スキゾー「いや、好きですねえ～。」

ジョーイ「とてもキレイです！――『ロトノ』との息もピッタリですね！」

カスミは天を仰いだ姿勢のまま『クリ』の方へ向いた。

どう？ アタシの演技

サトシ「カスミのヤツ……また『クリ』さんに視線送つてやがる……」

タケシ「でも初めてにしては良いステージだつたじゃないか。昔の水中ショ―の経験が役に立つたな。」

一方、控え室では……

ヒカリ「カスミすげー！ やるじゃない！」

ノゾミ「少し教えただけなのに……流石はジムリーダーだね。」

ヒカリ「こりや、強敵が一人増えたわね！」

ポッチャマ「ポチャマ！」

控え室のモニターにはミクリからの評価を受けているカスミが映し出されている。

『水ポケモンと水の美しさを存分に引き出した、実に素晴らしいステージだつた！』

『あああああ、ありがとうござります～……』

ちょっと前のヒカリみたいになつてゐる……

カスミは満面の笑みでステージ脇へと戻つていつた。

シユウ（…………流石…………と言つたところか…………。）

腕を組みながら静かに観戦しているシユウ。視線の先には演技を終え戻つていくカスミが…………。

ジムリーダーのコンテストへの介入…………別にこれが初めてではない。シンオウのメリッサも、コンテストを広めるため積極的に出場していると聞く。

そのかいあって、数年前まで認知度が低くあまり盛んではなかつたシンオウ地方でも、今ではすっかりコンテストが浸透している。今回のカスミの出場は、このカントー地方のコンテスト界にも良い刺激になつたことだらう…………。

…………変わつていく…………コンテストも…………「コーディネーターも…………

シユウ「…………僕も、このままではいけないね…………。」

周りに聞こえないように呟く。

その目には確かに、決意の光が宿つていた…………。

結局今回のコンテストで優勝をおさめたのはノゾミだった。

カスミは二次審査に進みコンテストバトルでノゾミと当たり戦つが、とにかくバトルオフを狙つて攻め続けたカスミに対し、ノゾミはそれを華麗に回避し続け、最後はポイントで決着。

その後の決勝ではヒカリとノゾミが戦い、僅差でノゾミが勝利。ライバル対決は接戦の末幕を閉じた。

カスミ「ハア。やっぱコンテストは難しいわね～……。」

ノゾミ「でもたつた一日の特訓での演技は凄いよ。流石だね。」  
ヒカリ「またノゾミに差つけられちゃったな……。せっかく追いついたと思ったのに～。」

カスミ「ま、ミクリさんにはしっかりアピールできたし、戻しとしましようかね。」

サトシ達はコンテスト終了後、近くのカフェでお茶をしていた。シユウも誘おうと思ったのだが、すでにどこかへ行ってしまったからしく見つけられなかつた。

サトシ「すいません！バナナパフェ一つ！」

カスミ「あんたね……」

カスミはため息をつきながらサトシを見る……

タケシ「ヒカリとノゾミは一緒に各地を回つてているのか？」  
ヒカリ「うん。別々に行動してるわ。たまにコンテストで会うけどね。」

ノゾミ「タケシ達は一緒に旅を？」  
カスミ「まあね。コイツのわがままで。」

そう言いながらパフェにがつづくサトシを指差す。

サトシ「バ、バガママツ『テダンダヨ！（わがままつてなんだよ！）』」

ヒカリ「ふうん。何か目的はあるの？」

サトシ「もちろんあるぜ！俺は強くなるために旅に出たんだ！」  
ピカチュウ「ピッカッピカッ！」

パフェを飲み込んだサトシは顔を輝かせながら言つ。

ノゾミ「ずいぶんと抽象的な…………」

ヒカリ「アハハハ！サトシらしい！」

タケシ「まあサトシだけでなく、俺達の修行行脚でもあるけどな。」

ヒカリ「修行かあ…………。ハルカも頑張つてるのかなあ…………。」

ヒカリは遠くの方を見る目をしながら呟く。どこか寂しそうな声だ。

カスミ「ヒカリはハルカと仲良いの？」

ノゾミ「そりゃもう、実の姉のようになんかくつて…………」

ヒカリ「ちょ…………ちょっとノゾミ！？」

タケシ「ハハ。ああ見えてハルカは姉御肌なところがあるからなあ。

「

まあ実際からかわれているのはハルカの方だつたりするのだが…………

それでも一人っ子のヒカリは姉という存在にずっと憧れていたので、ハルカのことは「コーディネーターとしての好敵手以外の意味でもよく慕つていた。

ゆえに、今はちょっぴり寂しいというのも本音であった。

姉御肌…………サトシはチラッとカスミを見て、

サトシ「どつかの誰かさんとは対象的だな。」

カスミ「バナナパフェ頼むヤツに言われたくないわよ。」

ヒカリ「でもわたしカスミに会えて良かつたわ！話してて楽しいし優しいし！」

サトシ「おまえこの前ノゾミと一緒に思い切りサトシの足を踏みつけた……。

……イテ……？」

カスミがテーブルの下で思い切りサトシの足を踏みつけた……。

カスミ「可愛いわねヒカリは～！ハルカの気持ちもわかるかも……。

……何てね！」

サトシ「うおっ！何か知らねえけどスゲエ耳障り！」

この後、ヤマブキシティのカフェテリアにはサトシの悲鳴が響き渡つたといつ……。

午後7時。

ヤマブキシティ・ポケモンセンター。

ヒカリ達とはカフェを出た後別れた。今はポケモンセンターのロビーでポケモン達の回復を待ちながらくつろいでいる。

サトシ「おーイテ……。つたくアイツ、少しは場所わきまえろよな

……。

カスミはシャワーを浴びると言つて、センターに併設する宿泊施設

に先に行き、タケシは自宅のジムに電話しに行つたので、今ここにいるのは旅仲間ではサトシのみだ。

サトシ「あの暴力女め…………。」

サトシはまだ何か言つている。  
もちろんサトシもある場では冗談で言つたのだが、しかしどうこう訳か、カスミから「かも」という単語が出てきた時、何かしつくつこないといつか、悪く言えば嫌な感じがしたのだ。  
理由は解らない…………が、自分は確かにそう思つてゐる。

まあ「かも」はアーツので聞き慣れてるからかな?  
なら…………同じ様にカスミが「ダイジヨバナイ」とか使つたら……やつぱ同じこと思うのかな?  
サトシは今自分自身の感情に困惑していた。

サトシ「ツツツツツツツツああ～～～何だコレは～～～何に困んでんだ俺は!～?」

タケシ「俺に言われても…………」

サトシ「うわ!～タ、タケシ戻つてたのか!～?」

タケシ「まあ…………つこさつきな。それより、歎みがあるなら聞くぞ?」

サトシはタケシをつづきの事を話してみようかと思ったが、やつぱりやめた。

何か…………聞かづらこ…………

サトシ「いや…………。俺はもう子供じゃないのだ。」

タケシ「はあ?」

サトシ「こーからこーから。ホテル戻るづぎ。」

セーフティーロードバイザーを出すサトシ。

タケシはポカンとした顔で歩いていくサトシを見ていく。

タケシ「…………アイツまで様子がおかしくなったか…………。

「

この詫みの正体が解らないうちまだ半供だとついでに、サトシは気づいていない…………。

ヤマブキシティ・ポケモンセンター前。

？？？「そもそも行くか？」

？？？「やうだな。ボスもじぎれを切らす頃だらう。」「

物陰で男が話す声が聞こえる…………。

？？？「彼は仲間に危機が迫ると、途端に周りが見えなくなる様だからな。」のやり方であれば恐らく成功するだらう。」「

男がゆっくりと振り向きながら、静かに言つ。  
その視線の先には

ヒカリ「…………」

両手と口を縛られ、ヒカリが目を閉じて横たわっていた

……

「？」「麻酔はあとどれくらいもつ？」

「？」「はつ。まだ10時間はもつかと。」

「？」「ふむ。十分だな……。」

男はホテルへ入つていくサトシとタケシを見る。いや、正確にはサトシのみだ。

「？」（……あんなガキが……「最凶のポケモン」のパートナーになるのか……？）

ふと疑問に思つ

が、

「？」（……我々はボスに従うのみ……。）

すぐに、その思考を止めた。

「？」「どうした？」

仲間の一人りが怪訝な顔をして声をかける。

「？」「何でもない。始めるぞ。」

静かに……だが確かに……「闇」は動き始めていた

## 嬉しいサプライズ！？

例のビルかのビルの地下  
薄暗く、何となく冷たい印象を感じさせる場所。

シド「……ああ。ビルをひとりひとり動いたらしき。」

サカキの部下…………つまつ「ロケット団」のシドが、その低い声で  
言つ。

携帯で誰かと電話しているらしい。

シド「…………心配するな。最悪の事態にはならない。つまづくべ  
」

電話の相手は何やら焦つてゐるのか、シドはなだめるような言葉を  
かける。まあ、あまり抑揚のない、堅い喋り方なのだが…………

シド「…………お前はお前の仕事をこなせ。こちらの事は気にするな。  
」

だが彼の気持ちは確かに伝わつてゐる様だ。電話の相手は次第に落  
ちつきを見せる。とそこく、  
カツ、カツ、カツ、カツ…………と、靴音が響く。

シド「…………また連絡する。」

それに気がつき、シドは電話を切る。

ルカ「…………お電話ですか？」

現れたのは、以前タマムシ美術館に忍び込んだ超美人工—ジエント、ルカだ。

シド「ああ。別働隊がついに、マサラタウンのサトシの捕獲を決行したらしい。」

シドは振り向かずに答える。

ルカ「そうですか。やつですね。」

シド「確實にこなしたいのだろう。何もなければうまくいく筈だ。」

そう言つてシドはタバコをくわえ、ジッポで火をついた。

フウ———と、煙を吐く。

ルカは黙つてそれを見ている……

ルカ「…………あの時は危ないところでした…………。」

苦い顔をしながらルカが言ひ。

彼女の言つ「あの時」とは、タマムシ美術館での作戦の事だらう。

ルカ「…………ありがとうございました。」

シド「……フン。珍しいな。いつもの自信はどうした?」

ルカはうつむいたまま、しばらく答えない。

シド「…………まあいい。今は目の前の任務をこなせ。それだけ

だ。」

ルカ「…………はい。」

カツ、カツ、カツ、カツ、

川力はその場を去つて行つた

シドは一人夕バソをぐわえたまま立っている。

ブーッ…ブーッ…ブーッ…彼の携帯が震えだす。どうやら電話のようだ。

「シド」「……俺だ。」

部下「『水の民』と思われる者達の足取りが掴めました。」

シドー  
数は?」

四ノ巻

シト、よじ  
偵察を繰り返す  
後において連絡する

ピッ  
電話を切る。

『水の民』。かつてポケモンと心を通わす事ができたとされる、大昔に栄えた一族。

既に絶滅したと考えられてしだいに、十数年前、数人ではあるがその存在が確認された。

しかし、彼らに関する遺物や書物はほとんど残っておらず、その歴史の真相は結局謎のまま。

う事だけだ。

シドに与えられた任務は、その『水の民』の生き残りの捕獲。ロカット団の研究チームが、彼等が『ワダツミ』と深く関わる

るといつ見解を示したためである。

「タジ」「水の匪」「マサラタウンのサトシ」現在のロケット団の主なターゲットは、この二つ

「アリ」

無表情…………何を考えているのかその顔からは全く解らない。

פְּנִים, פְּנִים, פְּנִים, פְּנִים

シドはポツケに両手を突っ込みながら、その場を去った。

？？？「ふう。遅くなっちゃったなあ……。」

確かに空にはもう星が輝いている。

しかし大都市だけあって「この街はこれからだぜ！」と言わんばかりに、街灯やらネオンやらがらんらんと輝いている。

？？？「とりあえず腹、じゅうえね。」

そう言つて彼女は街中を歩いていく。すると周りの人は何やらこつちを見てザワザワし始めた。

「ね...ねこアレ...」「何で...」「...」  
「キレ~イー。」

聞こえてくる声…………

しかし彼女は慣れている様で特に気にすることなく歩き続ける。すると、

????「……あ」

何かを見つけたらしい。満面の笑みで駆け寄る。

????「すみません!」

オヤジ「いらっしゃい! 何にこします?」

????「えつとじゅあ……」「ノルとノルとノル」とノルト  
さい」

オヤジ「おお~、お客さんよくばりだねえ! 毎度あります!..」

????「フフッ。これだけは譲れないの。」

そう言つて支払いを済まし、笑顔で去つていいく…………後ろから  
「また来てね~」といつ声が聞こえる。

????「うん! 美味しい」

両手のアイスクリームを嬉しそうにこぼおぼりながら彼女は言つ。その姿は結構なインパクトであろう。街中の人もポカンとした顔で見ている。

????「……久々に来たけど、やつぱり良いくこのねママフキシ  
ティ。」

サラ、

夜風が彼女の美しいクリーム色の髪と黒いドレスを静かになびかせた。

そしてそのまま、街のネオンの光の中に消えていった……

……

### ヤマブキシティ・ホテル

カスミ「サトシ……。さっきオーキド博士から電話来てたわよ。」

サトシ「博士から?」

風呂上がりしきカスミがジュークを飲みながら言いつ。

カスミ「後で研究所に連絡くれだつてさ。」

サトシ「ふうん。何だろうな。」

とにかくかけてみよう。

タケシ、カスミと共にロロビーにあるTV電話へ向かつ。

サトシ「こんばんは博士。サトシです。」

オーキド「おおサトシか。夜遅くにすまんのう。」

サトシ「いえ。それで博士。俺に何か用ですか?」

オーキド「ふむ。では手短に話すぞ。先日ポケモンリーグから連絡があつての。何でも近々、大規模なバトル大会が開催されるようなんじや。」

タケシ「バトル大会?」

オーキド「ふむ。全国から選りすぐりの使い手達が選ばれ行われる  
といふ事なんじゃが、サトシ、お前もこれにカントー代表として選  
ばれたそつじや。」

サトシ「えー？俺が！？」

タケシ「やつたなサトシ！」

カスミ「博士！アタシはアタシは！？」

オーキド「残念じゃが、これは一般のみ対象の大会の様でな、ジム  
リーダーの参加は受け付けてないらしいのじゃ。」

カスミ「ええ、そなんですかあ～…………。」

タケシ「まあカスミ。俺達は今回は見守る側に徹しようじゃないか。  
これも立派なジムリーダーの仕事だよ。」

カスミ「はあ……。それもそうね。」

サトシ「それで博士！他のメンバーとかは解りますか！？」

オーキド「そつじやの……。お前が知つとる者の中では、カントー  
ではヒロシ。それとシゲルも選ばれていたそつじやが、辞退したそ  
うじや。」

サトシ「えつー何ですか！？」

オーキド「アイツが言つては、「今は研究に集中したい」とのこと  
じや。」

研究か…………。

アイツにも本氣でうけこめる事が見つかったんだよな  
バトルできなこのは残念だけど…………そういう事なら俺も邪魔  
できない。

オーキド「まあそつ肩を落とすなサトシ。変わつと言つてはなんじ  
やが、他にも手強いお前のライバル達がたくさん選ばれとるや？」

途端にサトシの顔が明るくなる。

サトシ「例えば…？」

オーキド「ホウエンではハヅキ、テツヤ、コーディネーターだがシユウ、それにお前の昔の仲間でもあるハルカも選ばれておるぞ？」

え……………ハルカ？

今アイツ確か……………音信不通なんだよな……………？

この大会の事は知っているのだろうか？

タケシとカスミも難しい顔をしている……………

オーキド「うん？どうかしたかの？」

サトシはオーキドにハルカが音信不通状態であることを一通り説明した。

オーキド「ほお～。それはまた熱が入つておるの。」

タケシ「はい……。しかし連絡が取れない状態なので、ハルカがこの大会の事知つてるかどうか……………」

オーキド「ふうむ……。ジョーイさんに伝言を頼めば、ハルカがどこかのポケモンセンターに寄つた時にでも伝えてくれるじゃろう。まあそういうトレーナーやコーディネーターも沢山あるから、そんなに心配しなくても大丈夫じゃよ。」

そななんだ……こつぱいいるんだ……………

オーキド「やうこつ事なら、わしからジローイさん頼んでおひや。」

「サトシ「ありがと」」  
サトシ「ありがとうございます博士！それで、他にはどんなメンバーガ？」

オーキド「やうじやな……。シンオウからシンジが出てきておるぞ？」

シンジ..... 来ると思つたぜ..... !

オーキド「他にはジユン、ヒカリ、ノゾミもあるな。」  
カスミ「何だか昔の仲間が勢揃いつて感じね。ああ～やつぱりアタシも出たかった～！」

オーキド「とにかくサトシ、わしはお前が優秀なトレーナーとして選ばれた事を嬉しく思うぞ。この大会は出場するだけで、全国に名を知らしめる事ができるチャンスでもあるから。」

サトシ「ありがとうございます博士～。つおおおおおおおお～～燃えてきたぜええええええ～！」  
カスミ「つかれこつての～！」

サトシが両手を上げて叫ぶ。

その時ロビーにいた他の宿泊客数人が振り向いた.....

タケシ「俺達の分も頑張れよサトシ。」

カスミ「そうよ。恥ずかしい負け方したら許さないからね。」

サトシ「わかつてゐつて～な、ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ～！」

オーキド「サトシは相変わらずじやのあ。わしの用件は以上じや。詳しい日程などが解つたらまた連絡する。ではサトシ。頑張るのじやぞ？」

サトシ「はい博士～必ず優勝してみせます～～！」

ピジ..... 電源を切る。

サトシ「おおおおおおおお～～かけこむやいられないぜ～～今すぐ特訓だ～～！」

そう言つていつかの時のように外に駆けてこいつをさるサトシ……

が、

カスミ「流石にもう止めといた方が良いんじゃない?」

カスミがロビーの時計を指差す。見ればもう午後11時を回りつつしている。

タケシ「あまり根を詰めすぎてもポケモン達に負担をかけるだけだぞ?」「

サトシ「うーん…… さうだな。じゃあもう寝る……タケシ! 明日は6時に起こしてくれ!」

カスミ「自分で起きなさいよ……

タケシ「お前起こすのにいつも10分くらい掛かるんだよな……」  
カスミ「こぞとなつたらアタシを呼んでタケシ。水ポケモンで冷水ぶつかけて風邪ひかせてやるから。」

サトシ「いいです自分で起きます……」

コイツの発想はいちいち怖いんだよなまったく……  
三人はそれぞれの部屋へと戻つていった……

ピピガガッ

ロケット団員「準備はいいな？」

物陰から響く声

違う場所で待機する部下に通信機器で確認しているようだ。

ロケット団員「はっ。いつでも。」

ロケット団員「よし。今回我々の目標はマサラタウンのサトシの捕獲だが、作戦中に異常が発生した場合でも決して深追いはするな。我々が目立つてしまつてはロケット団全体が動きにくくなる。」

ロケット団員「はっ。」

ロケット団員「では行くぞ。」

ザザザザ

団員達が一斉に動き出す。

そんな事には構わず、大都市ヤマブキシティは相も変わらず騒立てていた

「ノンノン……………ドアをノックする音。

サトシ「ん?」

寝ているピカチュウとタケシを起こさない様そつとドアの方へ向かう。

ガチャ

サトシ「…………カスミ? 何だよこんな時間に?」

ドアの前には私服姿のカスミが立っていた。

カスミ「ちょっと……………顔貸してくんない? あ、タケシには内緒だよ…………?」

サトシ「え…………? ま、まあ良いけど…………」

カスミは珍しく頬を赤くさせ、何か恥ずかしそうな顔をしている……………つてか、タケシには内緒つて…………ふ、二人きりつてこと? しかもその顔

サトシ(いや…………まさかな…………)。

さんざん子供だ鈍感だと言われてきたサトシでも流石にギザギザしだらしい……………同時に彼の顔も何だか熱くなっていく……………二人は大して喋ることなく、ホテルのロビーを出て行つた…………

## わからない強さ

サトシ「な、なあ……ど」今まで行くんだ?」

カスミ「いいから付いて来て……」

サトシはカスミに言われるがままヤマブキシティのネオン街を歩いていた。

流石は大都市。時間も結構遅いはずだが、まだまだ眠らないと言つた感じだ。

サトシ「にしても……」

サトシはチラッと自分の右手を見る。そこにはカスミの手が。状況を説明すると、サトシは今カスミに手を掴まれ、引っ張られる様にして歩いている。

女の子と手を繋ぐなんてことは、サトシの経験上めったに無かつたため、どうも落ち着かない。

……一人きりになるのは今まで何度もあつたんだけど……  
10歳の頃旅してた時なんてショッちゅうだった。だからそんなに気にすることはないはずなのに……  
なのに……何か今は違う……違つて……何が違うんだ……?

などと考へていると、突然カスミの足が止まつた。  
どうやら考へ事をしている間に田舎地に到着したらしい。

カスミ「……着いたわ。」

サトシ「着いたつて……」「……」

ちょっとだけ顔が赤いサトシは辺りを見渡す。

少しだけ薄暗い。どうやら街中の裏路地のようだ。人々の騒ぎ立てる声がかすかに聞こえてくる。

カスミ「…………」

カスミは黙っている。手はもう繋がれていない。

サトシ「…………な、なあ、明田早いんだし…………用があるならわざと言つてくれよ。」

サトシはこの空氣に耐えられず、前にいるカスミに言つ。内心、サトシの心臓はバクバクだった…………何だよーっ何でこんな緊張してんだよ俺！？

カスミ「サトシはさ…………」

不意にカスミが口を開く。

カスミ「サトシは…………ヒカリの事…………どう思つてるの？」

サトシ「へ？ヒ…………ヒカリ？」

検討違い（？）のカスミの発言に思わず間抜けな声が出た。何で！？何でそんなこと聞くんだ！？

サトシ「ど、どうつて…………ヒカリは前に一緒に旅した仲間だし…………大切な友達だけど…………」

カスミ「ホント…………？」

サトシ「ほ、ホントだよ。そんなの当たり前だろ？」

カスミ「そり…………。」

カスミは背を向けたままで、その顔は見えない。

何だよ……何が言いたいんだよカスミは……。

ヒカリは大切な友達……そんなの当たり前だ。

じゃあハルカは？

ハルカも

つて！何でハルカが出てくんだよ！？今はヒ

カリの話だらうが！

ああ～もうっ！じれつてえ！

サトシ「おいカスミ！お前結局何が言いたいん……」

カスミ「じゃあ……そのヒカリのためなら、何だつてできる？」

カスミがサトシの言葉を遮り言つ。

サトシ「はあ？な、何だつてつて……それに寄る……かも……。

カスミ「ヒカリは大切な友達なんでしょ？」

カスミの必用な追求にサトシはもう半分やつけになり、

サトシ「つつつ！だあああもうつ！めんじくせえ！ああできるとも！～何だつてやつてやるさ！！友達だからな～！」

カスミ「そう……。わかつたわ。」

カスミは静かにそつ咳き、クルッと振り返つてサトシの方へ歩き出した。

その顔は……どこか安心した様なものだった。

サトシ「？お、おいカスミ……？」

カスミはその声にも対して反応せず、そのままサトシの横を通り過

ぎた。そして、

ピタリと、彼女の足が止まる。

カスミ「…………その言葉…………嘘じやないわね？」

サトシ「は？」

その瞬間、

バツ！－と、

突然カスミの周りに、黒い特殊スーツ（？）を着た男数人が現れた。

サトシ「え！－？な……何だ！－？」

状況がつかめず困惑するサトシ。

無理もない。なにせ、今まで自分とカスミ以外に人がいた気配は全くなかったのだから。

サトシ「…………」、これって何かのドッキリ？

思わずカスミに聞いてしまう。

カスミ「ドッキリ…………まあ似たようなモンかもね…………」

カスミの顔は笑っている…………が、何と言つか……怪しい笑み  
だつた。

カスミ「じゃ、タネ明かししましょうかね。」

バツ！－と、カスミが服をひるがえす。

そして…………そこに立っていたのは…………

ロケット団員「我々はロケット団・マサラタウンのサトシー一緒に来てもらひわよ?」

サトシ「なつ……ロケット団だつて!つてかカスミは!?」

カスミがいたその場所には、周りの男達同様特殊スーツに身を包んだ、謎の女が立っていた。

サトシはもう何がなにやら解らない。

団員「フフッ。まだわからない?さつきまでのあなたの友達カスミは私の変装。本物の彼女はヤマブキシティのホテルで寝息を立てているわ。」

サトシ「う……嘘だろ……!?」

さつきのが変装だつて!?それにしたつて出来過ぎてるだろ!?!姿形はもちろん、声やその雰囲気まで瓜二つだつた。いや、それより……ロケット団つて……!

「ロケット団」。カントー、ジョウウト地方を中心に活動している悪の秘密結社……と言えばしつくりくるだらうか?色々と裏で悪事を働いているろくでもない奴らだが、最近は影を潜めていたはず。

そんな奴らが……俺を狙つてる?

サトシ「い、一体俺に何の用だ!?!」

団員「だからさつき言つたでしょ?私達と一緒に来てもらひつて。」

サトシ「だからそれが何でだつて聞いてんだよ!?!」

団員「さあ?私も詳しくは知らないわ。でもボスが直々に……」

女団員はまだ何か言おうとしていたが、

スッと、それを遮つて団員の一人がサトシの前に出てきた。

団員「答える必要はない。マサラタウンのサトシ。とにかく我々と共に来てもいい。」

サトシ「……へつー俺がそう簡単に従うと思つか? 行くぞピカチュウ……」

そこでサトシは気が付いた。

そうだ……! ピカチュウつれてきてないんだつた……!  
ピカチュウだけではない。他の手持ち達もポケモンセンターに預けたままだ。

明日引き取らうと思つてそのままホテルに行っちゃつたんだっけ……

だが、後悔先に立たず。どうしようもない。

団員「ポケモンがいない貴様など只のガキだ。大人しく付いて来てもらおう。」

サトシ「ぐつ……一つのヤロオ……! ?」

団員に殴りかかるとするサトシ……が、突然その足が止まる。  
信じられない光景が視界に入つたからだ。

サトシ「ヒ……ヒカリ! ?」

団員の一人が手持ちであるうオドシシにヒカリを乗せ、こちらを見て笑つていた。

ヒカリは目を閉じたままピクリとも動かない。

団員「あまり騒いでもらつては困るからな。少し手荒な手段を取らせてもらつた。抵抗するなら……」

ボン！と、団員がストライクをボールから繰り出した。  
そしてストライクはゅっくりと、ヒカリの首筋にそのカマを突きつけた。

サトシ「なつ……！やめる……ヒカリは関係ないだろ！？」  
団員「お前が大人しく従つなら……この女は放してやる。わかるな  
？もう選択肢は無いぞ。」

団員「大切なお友達のためなら何でもできるんでしょ？？」

先ほどカスミに化けていた女団員がからかう様に言つ。

サトシ「…………！」

何も…………できない。

俺は…………ポケモンがないと何もできないのかよ…………！？  
目の前には数人の団員。しかもここは裏路地。  
少し異変が起きたといひで、眠らないこの街の活気にそれはかき消  
されてしまう。

眩しそうなネオンの光は、同時にいくつもの影を作り出していた。  
ドン…………サトシの背中が壁に当たる。無意識に後ずさりして  
いたのだろう。

このままじゃヒカリが危ない…………

サトシ（…………もつ…………行くしか…………）

サトシが口を開きかける…………その時だった！

？？？「何をしているのかしら？」

不意に、声が聞こえた。

女の……………声？

団員達「…貴様は……………！」

声が聞こえた方……………すなわち路地の入り口へ目を向ける。そこには……………

サトシ「シ……シロナさん！？」

後ろから射すネオンの光のせいで顔はよく見えない……………が、見間違う筈がない。

クリーム色の美しい長髪に黒いドレス、両手にはアイスクリーム……………は、もう無いが。そこに堂々と立つのはまさしく、かのシンオウ最強のトレーナー、シロナだった。

団員「チャンピオンが何故ここに……………！」

シロナ「たまたま通りかかっただけよ。それよりそこにいる子達、私の知り合いなんだけれど……用があるなら私を通してもらえるかしら？」

淡々とシロナが言つ。

凄まじいオーラをその身に纏わせながら……………

サトシ「……………」

もはやサトシは今の状況に圧倒され声も出せない。

普段のシロナは気さくでとても親しみやすい。そして、いざポケモンバトルとなるといつでも凛としていて、王者の貫禄をかもし出す。

だが……………今のシロナは……………前者でも後者でもない。  
目の前の人物を「相手」ではなく、「敵」と認識している。  
まるで……………牙を剥き出しにする獣の様。

「ク……………サトシが息をのむ……………」  
こんなシロナさん……………見たことない……………！

団員「……………」

団員達は黙つている。

ギン……………と、両者の視線が交差する……………

団員「……………さすがにチャンピオン殿が相手では分が悪い。」

団員がストライクをボールに戻す。

シロナ「……………ずいぶんと諦めが良いのね。」

団員「フツ……………諦めてはいない。通る道を変えただけだ。」

シロナ「……………」

団員は不敵な笑みを浮かべている……………

そして、黙りこくつているサトシを見た。

団員「……………」

サトシ「……………！」

何も言わない……………ただ、何か探る様な目でサトシを見ている……………

その瞬間、

ボシュウツ！…！と、

突然、辺りを黒い煙が包んだ。

サトシ「うつ……………？」

シロナ「えんまく……………！」

徐々にえんまくが晴れていく……………だがそこには、既に団員達の姿は無かった……………

シロナ「逃げられたわね……………」

しばらく嘔然とするサトシ……………が、

サトシ「ヒカリ！！」

サトシが倒れているヒカリに気が付き、駆け寄る。

シロナ「……………どうやら氣絶しているだけの様だけど、念のため病院へ運びましょう。」

サトシ「はい……………」

シロナ「サトシ君は大丈夫？」

サトシ「…………俺は大丈夫です。でも何でシロナさんが…………」

シロナ「その話は後で。とにかく今はヒカリちゃんを。」

サトシ「そうですね…………」

とりあえずは助かった……………だがサトシの顔は当然ながら冴えない。

俺の……………せいで……………

ロケット団は自分を狙ってきた。

だが、その魔の手は自分でなく、仲間にまで及んだ……………

恐らくは……………これで終わりではないだろう……………

今回はヒカリも事なきを得たが……………もしまだ誰かがさらわれたら

俺のせいでも、仲間が危険な目にあつた。それに……

サトシ（俺は、また何もできなかつた。）

サトシはいつかのタマムシ美術館強盗事件を思い出した。  
あの時も結局、何もできぬまま犯人に逃げられた。  
そして……アイツ……

ぶ。

ただ睨まれただけ……なのに……何もできなくなつてしまつた……

そして今回も俺は……ただ圧倒されたまま……

サトシ（俺のせいでも、仲間が危険にさらわれる……なのに俺は何もできぬ……）

強くなれば良いのか？あのワタルさんにも勝てるへりつ……  
でも……何か違う気がする。  
そういうのではない……もつと違う決定的な差を……彼等からは感じた。

サトシ（俺は、どうすれば……）。

ヤマブキシティの街は何事も無かつたかの様に相変わらず騒ぎ立てている……

サトシは病院へと急いだ。ビリジョウもない無力感を抱えながら……



## キャラ紹介2

シユウ 18歳

バラが似合う美少年コードィネーター。ハルカの永遠のライバル。コンテスト界でその名を知らぬものはいない。

彼のスマイルは一瞬で多くのファン（主に女性）達を卒倒させる威力を持つ。ちなみにヒカリも隠れファンらしい。

ライバルのハルカに好意を抱いており、数々のストーカー……アプローチを経てついに告白！彼の恋の行方やいかに！？

ノゾミ 17歳

ヒカリのライバルである天才コードィネーター。宝出身（嘘）。ザバサバしていて男らしい性格。でも根は優しく、好敵手のヒカリの事をいつも気にかけ引っ張っている。意外とお茶目な一面も。コーディネーターとしての実力も高いため当然人気もあるのだが、ファンの中には女性が結構いるらしい。

サカキ 40代後半？

ロケット団のボス。いつもろくでもない事を考えている。

今回は「最凶のポケモン」のパートナーにするべくサトシを狙う。それと同時に「ワダツミ」というものも手に入れようとしているらしい。

いつもニヒルな笑みを浮かべているイメージがある彼だが、意外と

猫好きだという情報も……？

シド 26歳 男性

オリジナルキャラクター。

ロケット団のN.O.・1幹部。黒髪短髪。くわえタバコ。いつも無表情で堅苦しい喋り方。

サカキからの信頼は厚く、重要な任務を任せられる事が多い。

現在は直属の部下であるルカと共に「ワダツミ」について動いている模様。

ルカ 25歳 女性

オリジナルキャラクター。

ロケット団のN.O.・2幹部。茶色の長髪。スタイル抜群。「完璧さ」にこだわるクールビューティーなエージェント。しかしこの小説の初任務ではいきなり完璧でなかつた……。

たがこれまでの仕事はまさしく「完璧」にこなしており、シドと共にロケット団の「二大戦力」として君臨している。

現在は「ワダツミ」に関する情報集めを担当。

## 果てなき道、見えないゴール

ハルカ「よし！ いつたん休憩！ みんな適当に散らばつて良いわよ  
」。

ハルカは今日もポケモン達と共に特訓に励んでいた。  
と言つても、やりすぎて自分も皆も追い詰め過ぎない様、適度な小  
休止を挟みながらである。

今はその休憩の時間。 ポケモン達も思い思いの場へ散らばつていく  
が、

ハルカ「……？ あなたは行かないの？」

他のメンバー達が去つていく中、バシャーモのみがその場を動かず  
にいた。

ハルカ「…………私これから広間に行  
くけど、バシャーモも来る？」  
バシャーモ「シャモ。」

頷くバシャーモ。

ハルカはニコッと微笑んでから歩き出した。 バシャーモも後をつい  
ていく。

ここはハルカの隠れ家的な所。 今では超有名人（？）の彼女にとつ  
ては必要不可欠な、誰にも知られたくない秘密の場所なのだ。

どうやら室内の様なのだが、その内装はさながら高級温泉旅館とい  
つた感じ。 所々に水路が通つており、心地良い水のせせらぎが聞こ  
えてくる。

しばらく廊下を歩いていると開けた場所に出た。 中央には大きな水

路があり、そこにはこれまた立派な和風な橋が掛けている。ほら、よく時代劇とかで見るアレ。まるで室内に川が通っているかの様だ。

ハルカ「ん？ 先客かな？」

見ると橋の中央で水路を眺めている人影が。ちなみに周りには誰もいない。

一人…………いや、一匹…………？

エルレイド「…………」

そこにいたのは刃ポケモンのエルレイドだつた。遠目でみれば人間と見間違えてしまいそうな出で立ちである…………。

ハルカ「エルレイドか。…………ん？ つてことは…………」

ハルカはそこで考えるのをやめた。

せつかくひと息つきに来たんだから余計なこと考えるの止めよう…………

ハルカも橋の中央に来て水の流れを眺める…………

しばらくそうしていると、ふと一つの考えが思い浮かんだ。

ハルカ「あれえ？ もしかして私について来たのって、そこのエルレイド君が目的だつたり？」

ふざけた様な口調で隣にいるバシャーモを見て言つ。一応言つておぐ、ハルカのバシャーモはメス（女の子）だ。

バシャーモ「シャモ？（は？）」

ハルカ「エルレイド君よくここに居るもんねえ？…………そつかあ～。

あなたもそんなお年頃に……。でもあなたとエルレイドだと身長差がネックかも……。バシャーモの方が『テカいし。』

エルレイド「？」

エルレイドもポカーンとしている…………が、バシャーモは何やら肩がピクピクと動いている…………

ハルカ「せめて外見がこう……もうちょっと可愛げがあつたらねえ……。」

バシャーモの周りを次第に禍々しいオーラが包み込んでゆく…………

そんな事には気づかず喋り続けるハルカ…………

ハルカ「どう見てもあなた女の子に見えな（ブスッ）刺さつた——！——！？」

ついにブツツンしたバシャーモがハルカのこめかみに爪を突き立てる…………。

ハルカ「ん何すんのよバシャーモ！！あなたには『冗談』と言つものが通じないんですかねえ！？」

バシャーモ「シャモツシャー——！（怒）」

ハルカ「いや、いやいやいやそれはマズい……私、上手に焼けちゃうかもバシャーモさん……！？」

エルレイド「…………」

もはや休憩もへつたくれもない…………とそこく、

？？？「こよつー……調子はどうよー！」

ハルカ「はいこのとおり……。」

？？？「…………調子悪そつだな…………」。

ハルカ「はあ……。」

？？？「お前今日何回目の溜め息？」

バシャーの怒りも何とかおさまり、今は橋の欄に手をかけて水路を眺めている。

が。

チャラ男「で?どうよ、最近の調子は?」

ハリ才 ..... おながきで感りがキ  
チヤラ野「えへ  
えあえあえ」ば。

ハルカ「まあまあですか。」

チャラ男 まあまあたる

「 チヤラ男 」…………… 会わなくていいのか？」

カポー——ン……………シシキジシの音が響く

「…………確かに少し寂しいけど…………私は強くなるつて決めた  
んですから…………。」

チャラ男「連絡とかも取つてねんだろ?別にそこまでしなくても良いんじゃねえのか?」

ハルカの脳裏に、家族や仲間達の姿が浮かぶ

ハルカ「……一度そつすると……何だか甘えりやうそつで……」

最初の頃……自分は甘えてばかりだつた……  
もちろん、それから色々と経験して、少しほは成長したと思う。  
でも……それでは全然足りない……

ハルカ「……まつーそつこいつですから、『心配なやうすに!』

チャラ男「バーカ心配じやねえよ『確認』だ。だが……どうしようもなくなつた時は……!」の俺に思いつきり甘えてくれても良いんだぜ?「

チャラ男がニヤけ顔で両手を広げてくる……

ハルカ「ご心配なさい!つ!私にはこの子達がいますから~!」

そう言つてわざとらしくバシャーモに抱きつくハルカ。

チャラ男「けつ。可愛げのねえ女だぜ。こんなほつとこで行こうぜえハルレイドお。」

どうやらハルレイドはこのチャラ男の手持ちだつたらしい。そつ言ってハルカに背を向けて去つていく

ハルカはしばらくそれを見ていたが、いつしか自分が笑つてこむ

とに気づいた。

# ハルカ「」

## 自然と心が静まつていいく

『ホウエンの舞姫のハルカさんですよね！？』

『そ、そ、う、だ、け、ど、』

『お願いします。俺はシンハーレー教えてください。』  
『え? 旅についてきたい?』

『俺は絶対トップコーディネーターになつてやるんです!』

『トップourkeイネーターか…………私と同じね。』

『行きましょうよー！俺はこんな奴ら放つておけない！』

あなたを見てると……昔の仲間を思ひ出すかも

ハルカ「！」

ハツ…………と、我に帰る。

ザ――――水流――――――

いつの間にか、拳を強く握りしめていた。

ハルカ「…………」

ハルカはこれ以上ここに居るのが嫌になり、その場を去った

ヤマブキシティ・病院

ジュンサー「じゃあ、後ろからいきなり？」

ヒカリ「はい……。歩いていたら男の人が後ろからいきなり来て、何か……布みたいなので口を塞がれました……。」

ロケット団による拉致未遂事件の翌日。サトシ達はジュンサーに事情聴取を受けていた。

幸いヒカリは怪我なども無くすぐに退院できたのだが、事情聴取のため皆まだ帰らず病院の個室に居る。

タケシ「一人だったのか？ノゾミは？」

ヒカリ「ノゾミとは途中で別れたから……。」

ジュンサー「そう……。怖かったでしょうね……。」

ヒカリ「はい……少し……。」

弱々しく答えるヒカリ。

無理もない。あれからまだ一日も経っていないのだ。身体的には丈夫でも、精神的にはダイジョバナイ。

カスミ「でもびっくりよね……。まさかアタシに化けてくるなんて

……。」

容姿、声、そして雰囲気……全てが瓜二つ。変装と言つてはあま

りにも完成度が高すぎる。

それだけロケット団の技術力が高いという証拠だらう。

ジュンサー「サトシ君。カスミさんに化けたロケット団員が部屋に来たのは何時頃?」

サトシ「確かに夜中の2時頃だったと思います。」

ジュンサー「なるほど。皆が寝静まつた所を見計らい、しかもサトシ君がポケモン達をポケモンセンターに預けたままという事も、奴らは知っていたのよね?」

サトシ「はい。多分。」

昨日の団員の余裕のある口振りや態度を思い出し、やつらがやつらサトシ。

ジュンサー「狙いに狙つた計画的犯行つて所ね。そして恐りく、あなた達は奴らに。」

タケシ「監視されていた。という事ですか?」

タケシがジュンサーの言葉を遮り静かに言つ。

ゾッ 思わずサトシ達の背筋が凍る

カスミ「監視つて 一体いつから?」

ジュンサー「解らないわ。ただ そうだとすれば、今も監視されている可能性が高いわね。」

ゾゾツ 再び得体の知れない悪寒がサトシ達を襲う

だがジュンサーの意見は的を得ていると言つて良いだらう。

奴らはまだ.....諦めてはいない。

またサトシを拉致するためには.....隙をつかがつてゐるに違いない。

い。

ジュンサー「ロケット団はあなたを狙つていていた様だけど.....サトシ君、何か心当たりはある?」

サトシ「いや.....特にね。」

(注)あのバカトリオのことは今は都合良く忘れて下さい。

ジュンサー「そつ.....でも解らないわね.....。一体なんのためにサトシ君を.....?」

シロナ「ジュンサーさん。他に似たような事件は?」

今まで黙つて話を聞いていたシロナが不意に言つ。

ジュンサー「いえ。ロケット団がトレーナーを拉致したといつ案件はこれが初めてです。」

シロナ「では.....ロケット団は完全にサトシ君のみを狙つてい

る.....といつ訳ですね.....。それもその為なら手段を選ばない。」

ビクッ.....サトシの肩が動く。

ジュンサー「ええ。奴らはかなり大胆に動いてきています。それに

よる「一次被害も、何としても防がなくては.....。」

シロナ「それに.....ロケット団の狙いは、恐らくサトシ君の拉致だけではない。」

カスミ「え?」

タケシ「どういう事ですか?」

ジュンサー「.....タマムシ美術館の強盗事件を覚えてる?」

「.....」

ピクツ…………… またしてもサトシが反応する。

タケシ「はい…………… といふか、俺達もそここ居合わせていました  
し……………。」

ジユンサー「そつこえばそつだつたわね。それにしても何て偶然……。  
カスミ「ハハ……………。」

カスミが苦笑いする……………

ジユンサー「あの事件も恐らしく、ロケット団の仕業だと私達は踏んで  
いるの。」

サトシ「アイツらも……………ロケット団……………！？」

忘れもしない……………まるで自分をバカにするように去つてい  
つた二人……………

ジユンサー「……………その時奴らが奪つていったのは……………ある古  
代ポケモンに関する資料だつたの。」

古代ポケモン……………前に二コースのインタビューで館長が言つてい  
た。

確か……………研究が進めば新たなポケモンの存在が判明するかもしれ  
ないとか何とか……………

ジユンサー「その古代ポケモンの名は……………『ワダシミ』。」

サトシ「『ワダシミ』……………。」

シロナ「まだ名前しか解つていないけどね。」

古代ポケモン『ワダツミ』。新たに発見された謎。

この世にはまだ解明されていない謎が数多く存在する。そしてそれは深い海の様に果てしなく、暗い。

ジュンサーは続ける。

ジュンサー「公にはなってないけど、実は、奴らの動きはそれだけではないのよ。」

シロナ「彼らは陰で様々な場所へ出向き、資料の回収や調査を進めていた。そしてそれは全て、その『ワダツミ』に関する物だった……。」

タケシ「つまり……ロケット団はその『ワダツミ』を狙っていると……？」

ジュンサー「ええ。その可能性が高いわ。」

シロナ「まあ……最近研究が始まつたばかりで、その古代ポケモンが本当に存在するのかもまだ解つてないけど……彼らの熱の入れようからして、何かアテはあるんでしょうね……。」

カスミ「そのポケモン使って世界征服つてわけ？相変わらずろくでもない事考へんのね……。」

カスミが呆れたように溜め息混じりに言つ。

古代ポケモンの復活……サトシはいつかのアクア団とマグマ団を思い出した。

力を手に入れようとし、力に飲み込まれた哀れな集団。

その結果生み出されたものは……何も無かつた。

もし……ロケット団が『ワダツミ』の復活を成功させたら……同じ様な事になるんだろ？

いや、それどころか……

ゾッ……………今日三度目の感覚。

サトシ（さくでもないことになるに決まってる……。）

止めなくてはいけない。サトシの直感がそう叫ぶる……が、

サトシ（でも……俺は……。）

彼らから感じた……決定的な差。

何の差かはわからない……それを埋める手段も当然わからない

サトシ（……）こんな俺が……本当に奴らを止められるのか……？）

いつもならこいつ事には真っ先に首を突っ込んでいくサトシなのが、彼らしからぬネガティブな思考が、今はそれを止めていた……

ジュンサー「今の所、サトシ君の拉致とその『ワダツミ』の復活が関連しているかは解らない。けど確かなのは、奴らの動きが以前より活発化しているという事。」

シロナ「でも私達ポケモンリーグも、この事態を深刻にとらえ、動き始めているわ。大丈夫、あなた達の未来は、私達が守るわ。」

サトシはつづむいたままだ。

タケシ達もまた、うかない顔をしている。

ジュンサー「皆、解つてはいるとは思つけど、今日話した事は他人には言つちや駄目よ？」

シロナ「サトシ君。目的は何であれ、口ケット団はあなたを狙つて

る。ぐれぐれも氣をつかるのよ。」

バタンシロナ達は病室を出て行つた

サトシ「」

「まあじゃいけないそれはわかつてこの

なのにどうしたらいいのか解らない

前にワタルさんに負けた時も似たような挫折を味わつた  
でもその時は「勝つためには」とか「次にどうあるべきか」とか考えてた

でも今は何を考えればいいのかも解らない

サトシ（俺は何をすれば良い）

グッとサトシはただ拳を強く握りしめた

黒てなき道、見えない「ホール（後書き）

ヒカリ「あの…………わたし忘れられてないよね？」

## 加速する闇

タマムシシティ・タマムシ美術館。

先日の強盗事件を受け大幅にセキュリュティが強化されたこの美術館。既に営業は再開されおり、今日もたくさんの来館者でにぎわっている。

そんな美術館の奥にある応接室。

館長「いやはや、誠に申し訳ない……。本当は今日君に見せるはずだったのに、こんな事になつてしまつとは……。全く情けない。」

大きなテーブルをはさんで、二人の人物が向かい合わせに座つている。

一人はタマムシ美術館の館長。

そしてもう一人、少し明るめの茶色のツンツンヘアの少年……いや、大人っぽい雰囲気を漂わせる彼の事は青年と言つても良いかもしねれない。

シゲル「いや、過ぎた事を言つても仕方ありません。僕は今日は確かに『ワダツミ』の資料を見せていただく予定でしたが、ここの魅力は何もそれだけではない。それにこの様に館長と直接お話できる機会もいただけたのですから、僕にとつては十分有意義な時間ですよ。」

力チャ.....「コーヒーのカップを置きながらシゲルが言つ。

館長「そつ言つてもらえると嬉しいね。」

シゲル「しかし……そうは言つても大損失ではありますね……。あんな貴重な物を……。」

館長「ああ……。全てがこれからだった…………。」

ロケット団のルカの手によつて盗まれた古代ポケモン『ワダツミ』への手掛かり。研究が進めば、この世の歴史をまた少し掘り起したかもしないといふのに…………。

館長「だがアレはまさしく、これから研究を進めようと思っていた代物だ。国家レベルの技術を持つてしてね。それをポケモンマフィアなんて連中が持ち帰つて、一体どうするつもりなんだ……？」  
シゲル「簡単に考えつく事としては金にするとかでしようが……。」

だが、ジュンサーに聞いた話では奴らは他にも『ワダツミ』について色々と嗅ぎまわつてゐるとか…………。  
それも相当な時間と戦力を注ぎ込んで…………。  
となると、やはり金田当てではない線が濃いか…………。

館長「シゲル君…………？」

突然黙り込んだシゲルに怪訝な顔を浮かべ問い合わせる館長。

シゲル「失礼。何でもありません。」

おっと、これはまだ他言してはいけないんだったな。顔にも出さないようになないと…………。

館長「奴らにアレの研究を進められるだけの技術があるとは考えにくい…………。」

館長はまだウンウンと唸つてゐる…………。

シゲル「……目的はともかく、奴らのやつた事は許される」とではない。早く捕まつてほしいのですね。」

館長「そうだな。それにこちらも気をつけないと……またいつ同じ様な事が起きたかわからない。」

シゲル「あれからこここの警備体制はとても強化されたようですね。」

館長「ハハハ。反省した結果だよ。」

シゲルはこの後30分ほど館長との雑談を楽しみ、それから美術館を軽く見て回つた。

シゲル（それにも口ケット団め……ちょっと大人しくしてると思えば、戦力強化でも図つてたつてわけか。）

恐らく口ケット団は『ワダシミ』の研究を進められるだけの技術を既に持つていて。それにここ最近の奴らの動きは、こちらが言うのはなんだが手際が良い。つまりは、組織のレベルが上がっている。相当力を入れている証拠だらう。

そして、気掛かりな事がもう一つ……

シゲル（やれやれ……。サトシ君も人気者になつたものだな……。）

そう。ロケット団はサトシも狙つていて。しかしこつちに關してはその目的が全くわからない。

戦力強化等のために強いトレーナーを欲しているのならもつと多くの人を狙うだろうし、サトシより強いトレーナーもまだまだいる。サトシのみを付け狙つてている理由が今のところ思いつかない……。

……

シゲル（とりあえず、今日はおじい様の所へ戻りつ。）

そう思い、美術館の外へ出て駅へ向かおうとするシゲル。とそこへ、  
ブーツ……ブーツ……彼の携帯が震えた。

見るとオーキドからの着信だった。

シゲル「はい。もしもし。」

オーキド「おお～急にすまんのシゲル。実はお前に研究所へ戻つて  
きてほしくての。連絡したのじや。」

シゲル「僕もちょうどそちらへ戻るうと思つていたところでした。  
しかし、おじい様の方から戻つてくれなんて言つとは珍しい……。  
何かあつたんですか？」

オーキド「うむ。例の『ワダシミ』に関して調べていたんじやが、  
実は興味深い事が解つての。」

シゲル「興味深い事？」

オーキド「シゲル、『水の民』を知つてあるか？」

シゲル「ええ。話になら聞いたことがあります。確か……大昔に栄  
えていた一族ですね？」

オーキド「そうじや。じやがその歴史にはまだまだ謎が多くての。  
『水の民』の存在 자체が確認されたのも割と最近なんじやよ。」

シゲル「その『水の民』が『ワダシミ』と何か関係しているんです  
か？」

オーキド「うむ。それもどうやら、かなり深く関わつているらしい。」

シゲル「どういう事です？」

オーキド「まあ詳しくは研究所で話す。とりあえず戻つてくれ。」

シゲル「わかりました。すぐに発ちます。では。」

ピッ……電話を切る。

オーキドはどいつも何かを掴んだらしい。

「ロケット団」は『ワダツ!!』を狙っている。そのターゲットの事が少しでも解れば奴らの先回り、あるいはその計画を阻止できるかもしれない……

外は既に日が落ち始めている。急いで戻るつ。シゲルは駅へと急いだ

どこの街のどこの海沿いの道。

ブロロロロロ

大きな滑車を引いた車が颯爽と走っている。

ヒロミ「パパ～！ そろそろランチにしようよ～！」

カイ「そうだな。そろそろ腹も減つてきた。」

ミナモ「確かにここなら海も見えるし、休憩にはもつてこいの場所

ね！」

車を止め、適当な所にアウトドア用のテーブルやら椅子やらを広げる。

ザザーーン…………心地良い波の音。

シップ「ああピザが焼けたぞ！」

これまたアウトドア用（？）の大きな窯からピザを取り出し、テーブルに並べるシップ。他にもパスタやサラダなど様々な料理が並べられている。

ヒロミ「うわ～おいしそう！」

ミナモ「さあ、冷めない内にいただきましょう！」

力チャ力チャ…………浜辺で食事をとる4人。

空は快晴。静かに吹く潮風。アウトドアにはもってこいの日だ。しかしこの一家。実は毎日がアウトドア。それもそのはず、何故なら彼らは……

ヒロミ「今日の水中サーラスも大盛況だつたわね！」

シップ「そうじやな。宣伝に金をかけたかいがあつたわい。」

そう。彼らは「マリーナ座」の一家。水ポケモン達と共に主に水を使つたシヨーを繰り広げるサーラス団だ。

一家の大黒柱でありサーラス団のリーダーでもあるカイ。その妻ミナモ。一人娘でサーラス団の花形のヒロミ。そして最年長である祖父のシップ。この4人と水ポケモン達で全国各地を回り、シヨーを行つているのだ。

そして今日のサーラスも大成功。今は次の現場に移動中である。

ヒロ//「皆、今日もお疲れ様。」

そうね、ポケモン達をボールから出し海へ放すヒロ//。ブレイゼル、マンタイン、タマザラシ等々……皆嬉しそうに泳いでいる。

カイ「どうだい？ ポケモン達の調子は。」

ヒロ//が海で遊ぶポケモン達を眺めていると、父であるカイがたずねてきた。

ヒロ//「うそ。見ての通り皆元気よ。」

カイ「本当に楽しそうだね。ヒロ//も一緒に泳いできたらどうだい？」

ヒロ//「そうね。でも今は食べたばかりだから、もつひとつ休んでからにするわ。」

カイ「うむ。しかし心なしか、ポケモン達がいつもよろはしゃいでいるような気がするなあ。」

ヒロ//「うーん？ 言われてみればそんなような気も………」「ミナモ、皆既月食が近いからじゃない？」

後片付けを終えた母、ミナモが話に割つて入る。

ヒロ//「えつ、やつなの？」

カイ「そう、えばそうだつたな。前回はサトシ君達と会つた時だから……もうかれこれ6年ぶりか……。」

ヒロ//「懐かしいなあ。あの時は大変だつたわよね。」

ヒロ//は約6年前に起きた、『水の民』の一族に代々伝わる秘宝「海の王冠」と、伝説ポケモン「マナフィ」を巡る大騒動を思い出し

た。

「海の王冠」を手に入れるため、海賊ファントム一味が皆既月食の時のみに姿を現すという「海の神殿アクリーシャ」を強襲。だがサトシ達やポケモンレンジャーの活躍によりファントム一味を撃退。「海の王冠」も「マナフィ」も事なきを得、無事、「海の神殿アクリーシャ」へと帰つて行つた。

あれから早6年……

ヒロミ「サトシ達元気かなあ……。」

シップ「サトシ君なら、この前寄つた街のテレビでたまたま見たぞ？チャンピオンのワタルさん相手に熱いバトルを繰り広げておつたわ！」

いつの間にか近くに来ていた祖父、シップが言へ。

ミナモ「私もこの前……って言つても結構前だけど、テレビでコンテストに出てるハルカちゃん見たわよ？ますます可愛くなつてたわ。ヒロミもつかうかしてられないわよ？」

ミナモが一やけながらヒロミを横目で見る。

ヒロミ「アハハ。それは大変ね。でもサトシもハルカも凄いわねえ。今ではすっかり有名人だもの。」

シップ「じゃな。6年前のあの幼い顔が懐かしいのあ……。」

ヒロミ「でも私、今になつて思つんだけど、あの二人けつこうお似合いだと思わない？マナフィの父親と母親役なんかに抜擢されちゃつてさあ。あの後何か意識とかしなかつたのかなあ？」

ヒロミが田をキラキラさせながら言つ。

ミナモ「う~ん…………あの時の一人の様子だと、特に何も無さうな感じが…………」

カイ「いや、それはわからんぞ？」

ヒロミ「あれ？パパもこーいう話、以外と好きだつたり？」

この後この話題で10分くらい盛り上がったとか…………

ヒロミ「あーつていうかもうすぐ既月食つて…………もしかしてまた

「海の神殿アクーシャ」が！？」

カイ「ああ。現れるかもしねんな。」

「海の神殿アクーシャ」は、大昔に『水の民』がポケモン達との交流を図るために創られた建造物だ。常に潮の流れに乗り漂流しており、普段は人間の目には見えない。しかし皆既月食の時にだけその姿が確認できる様になるのだといつ。

初めは陸地にあつたのだが、神殿にある「海の王冠」を狙う者達が次々と現れ、『水の民』が彼等から王冠を守るためにやむを得ず海上に漂流させたとされる。

ヒロミ「今度はどこに現れるのかしら？」

カイ「う~む…………こればっかりはわからんな。前回はマナフイが導いてくれたから…………。」

シップ「今回はマナフイもおらんからのお…………。」

「蒼海の王子」と呼ばれる伝説ポケモン「マナフイ」だけは、本能的に「海の神殿」の場所が解るのだといつ。神殿に帰り、水ポケモン達を治めるためだ。

ヒロミ「だよねえ…………。ハア、見せたかったなあ。ハルカ達に…………。」

ミナモ「まあ……探しよつも無いし、今回諦めるしかないわね。」  
カイ「そつだな。まあ、そろそろ出発しよう。日が暮れる前に次の  
街に着きたいからな。」

結局話に夢中で海は泳げなかつた。まあ仕方ないわね。  
車に向かうヒロミ達が、

シップ「な……何じやこれは……！」

突然、先に車に向かっていたシップが声をあげた。

ミナモ「ど、どひしたの？」

シップの尋常ではない様子に戸惑いながらミナモが聞く。  
シップが無言で指を指す。その先には、

ヒロミ「何よ……これ……！」

何と、車のタイヤがズタズタに裂かれていた。これじゃあとても走  
れそうにない。

唖然とするマリー・ナ座一家、

カイ「一体誰がこんな事を……！」

ギリ……と悔しそうに歯噛みするカイ。

恐らく、自分達が休憩のため車を放っていた隙にやられたのだろう。  
周りには街などもなく、人の気配も無い。そう思った時だ  
つた。

????「お前達は『水の民』だな？」

ズカズカズカ！

突然、近くの林から黒い特殊スーツを来た男女が現れ、ヒロミ達を囲んだ。

その数、十数人。

シップ「な……何じゃお前達は！？」

？？？「今質問しているのはこっちだ。お前達、『水の民』だな？」

グルル…………と、

謎の男女達の手持ちと思われるポケモン達がヒロミ達を威嚇する……

……

カイ「た、確かにそうだが……それが何だと言つんだ！タイヤを裂いたのもお前達の仕業なのか！？」

怒りに満ちた表情で怒鳴るカイ…………だが相手はそれを無視して、

？？？「リーダー。確認が取れました。指示を。」

すると、男女達の後ろから一人の男が歩いてきた。

黒髪短髪。くわえタバコ。鋭い目つき。他の男女達とは違う、黒いジャケットの様な服。そして左胸の辺りには「R」の文字が。その男はまさしく……

シド「…………」

ザツ…………と、

ロケット団N.O.・1の実力者、シドがヒロミ達の前に立つ…………

シド「我々はロケット団。『水の民の』諸君。悪いが一緒に来ても  
う。」

## 俺がやりたいこと

タマムシシティ・タマムシ駅。

ホールには沢山の人に行きかっている。

サトシ「じゃあ、気をつけて帰れよ。」  
ヒカリ「うん。ありがとう。」

その後、サトシ拉致未遂事件は新聞沙汰になってしまった。  
見出しへ「シンオウの妖精誘拐！？ロケット団復活か！？」と、何  
故かヒカリの名前だけが大きく載っていたという。……。  
そんなメディアにも取り上げられる程の事件に巻き込まれたのだから、  
当然母のアヤコも心配し「一度帰ってきてなさい！」とすぐに電  
話で言われたヒカリなのだつた。

そんな訳でヒカリは一度、実家があるシンオウに戻る事になつた。  
今はその見送りだ。

タケシ「じゃあな。家に着いたら連絡くれよ？」  
カスミ「ジュンサーさん、ヒカリをよろしくお願ひします。」

そう言つてヒカリの護衛のためついて行くジュンサーに頭を下げる  
カスミ。

ヒカリ「ちょっと一人とも、わたし子供じゃないんだから……。  
心配してくれるのは嬉しいんだけど……ヒカリも苦笑いである。

サトシ「それとヒカリ…………今日はホントごめんな…………。」

サトシが「つむぎ加減で、弱々しく言ひ。

ヒカリ「だからサトシのせいじゃないってば。もう謝らないでよ、ね？」

サトシはあれから、自分のせいで彼女が事件に巻き込まれたと自責の念を感じ、ヒカリに謝りっぱなしだったのだ。

サトシ「いや……どう考へても俺のせいなんだ……。アイツ等は俺を狙つてた……。」

ヒカリ「だからもう良いってば。ほら、わたしは大丈夫だからダイジョーブ！」

物凄くネガティブなサトシを何とか元気づけようと、あえて明るくヒカリは言つ…………が、やはりサトシは「つむぎ」たまだ。

タケシ「サトシ、ヒカリ本人がこいつ言つてくれてるんだ。自分を責めるのはもうやめろよ。」

カスミ「そつよ。アンタがそんなどこつちもブルーになっちゃうわ。」

サトシ「…………ああ…………。」

空返事…………すると護衛のジュンサーが時計を見て、

ジュンサー「そろそろ電車が来るわ。行きましょうヒカリさん。」  
ヒカリ「あ、ハイ。それじゃサトシ、タケシ、カスミ、それとヤマブキのジュンサーさん、色々お世話になりました！また会おうねみんな！」

ジュンサー「では、サトシ君達をよろしくお願ひします。」

護衛のジュンサーが、同じくサトシの護衛に付いているヤマブキの  
ジュンサーに言ひ。

ジュンサー「ええ。まかせて。」

バツ……と敬礼するジュンサーの一人。相変わらず見分けがつかない……

タケシ「元氣でなヒカリ！」

カスミ「着いたら連絡、忘れないでね！」

ヒカリ「わかつたわカスミお母さん！サトシも元氣でね！」

カスミ「お母さん……。」

サトシはまだ若干うつむいていたが、無理やり笑顔を作った。

サトシ「ああ。アヤ「さんによろしくな。」

ヒカリ「それと……サトシも気をつけてね……。」

笑顔だが、とても心配そうにヒカリが言ひ。

サトシ「俺はダイジヨーブ！俺のダイジヨーブだから大丈夫だよ！」

ヒカリ「ちょっとソレドーいう意味よー？」

ジュンサー「ヒカリさん、電車が……。」

ヒカリ「あつーごめんなさい！じゃあわたし行くわーまたね～みん  
なあ～！」

今度こそヒカリはちよつと急ぎ足でその場を去つて行つた……

サトシは歩いていくヒカリの背を黙つて見ている……

ジュンナー「サトシ君、ロケット団は私達が必ず捕まえるから。あなたの気持ちもわかるけど、あんまり落ち込まないで。ね？」

サトシ「はい……。」

ジュンナー「……とりあえず、一緒にヤマブキの警察支所へ行きましょう？」

「……」

サトシ達はヤマブキシティにある警察支所へ向かった。

ヤマブキシティ・警察支所。

サトシ達は警察支所の応接室にいた。

お茶が出されている。警察署らしい、質素な部屋だ。

カスミ「まつたく、最初はアタシ達の修行の旅のつもりだったのに

……とんでもない事になっちゃったわね。」

タケシ「カスミ……その話は……」

カスミ「あ……。」

カスミがしまつたと言った風な顔をする。

見ると横にいたサトシがあからさまな反応をして、

サトシ「悪い……巻き込んでしまって……」

普段のサトシからは信じられないほどのネガティブさだ。

カスミ「や、やーねえ[冗談よ]」「今こいつのままで今から

また」「じやないじやない！」

「……」

何とかフォローしようとするカスミ。顔からは冷や汗が。

サトシ「今に始まつた訳じゃないか。ホントそうだよな……。俺、考えてみたらみんなに迷惑かけてばかりだ……。」

タケシ「おいカスミ……。」

「どうやら逆効果だつたようだ……。タケシがカスミを横目で見る。

カスミ「いや……だからそういう意味じゃなくて……ああもうつーじれつたいわね！」

バンッ！と、突然カスミがテーブルを叩いて立ち上がる。サトシもタケシも驚いた顔でカスミを見上げた。

カスミ「いつまでそーしてるつもり！？辛気くさいのよアンタ！」

サトシ「なつ……俺はただ一人に申し訳ないと思って……」

カスミ「だからそれがアンタらしくないって言つてんの一見てると

こつちがイライラしてくんのよ！」

サトシ「そ、そんな言い方ねえだろ！？」

タケシ「お、おい二人共……。」

応接室にサトシとカスミの怒号が響く……いや、もはや室内から漏れて所内にも響いていた……。

カスミ「無い頭でいつまでも悩んで……大体アンタは何がしたいわけ！？」

サトシ「…………！」

カスミの言葉が……………サトシの胸を突いた。

何が……………したい……………？

すると、「ンン」とドアがノックされ、

ジュンサー「すみません……………もつ少し静かに……………」  
タケシ「す、すみません……………」

注意されてしまった

だが今のサトシにはその声も聞こえていなかつた。

サトシ（……………俺は……………。）

スッ……………と、サトシが立ち上がる。

サトシ「悪い一人共、俺ちょっと外の空気吸つてくれる。」

タケシ「あんまり遠くに行くなよ。」

サトシ「ああ。」

バタン……………サトシは応接室を出て行つた。

タケシ「……………お前の言葉が心に響いたみたいだな。」

タケシが微笑みながらカスミに向つて。

カスミ「アハハ……………つい思つたことが口に……………。」

タケシ「フッ……………でも、もう少し場所もわきまえりよ？」  
カスミ「ハイ……………。」

ヤマブキ警察支所前。

サトシ「…………」

サトシは一人庭にあるベンチに座っていた。

ピカチュウ「ピカピ…………。」

肩に乗るピカチュウが心配そうにサトシの顔を覗きこんだ。

サトシ「アンタは何がしたいの? だつてや…………。言われてみれば、  
そんな風に考えたことなかつたな…………。」

呟くように言つサトシ。

何をすべきかじやなくて…………何がしたいか  
そんな事は…………決まつてゐ。

? ? ? 「サトシ君?」

少々物思いにふけつてゐると、突然声をかけられる。

サトシは声がした方を見た…………そこには…………

サトシ「シロナさん!」

シンオウ地方のチャンピオンであり、そして拉致事件の時、サトシ  
とヒカリを間一髪のところで救つてくれた恩人、シロナが立つてい  
た。

シロナ「どうしたのこんな所で？タケシくんとカスミちゃんは？」  
サトシ「二人は中にはいます。俺は…………その…………考…………え事…………とこつか…………」  
シロナ「やべ…………」  
シロナ「やべ…………」

やつ…………シロナはサトシの隣に腰掛けた。

シロナ「…………」

シロナは黙つている…………まるで何かを待つているかの様に

サトシ「…………俺…………」

サトシが静かに口を開く。

サトシ「俺…………やつをカスミに言われたんです。アンタは何がしたいのつて…………」

シロナは目だけでサトシを見て聞いている

サトシ「俺はあれから…………どうしたらいいか解らなくて…………タマムシ美術館の時も…………ヤマブキの事件の時も…………俺はただ圧倒されたまま…………何もできなかつた…………」

シロナ「…………」

サトシ「俺は自分がどうすれば良いのかずっとと考えてました…………でも…………何か…………差とかじやなくて…………違いを見せつけられたつていうか…………。結局それをどう埋めたらいいのか解らなくて…………ずっと悩んでました…………」

サトシ……………微風がサトシとシロナを撫でる……………

サトシ「そしたらアイツに……………カスミに怒鳴られました。無い頭で悩むな、そんなのアンタらじゃないって。つたく、こっちは真剣に悩んでたってのに……………。」

呆れたよつて言つサトシ。だが、その顔は笑つていた……………

サトシ「でも、それで気が楽になりました。確かにウジウジ悩むなんて……俺らしくない。そして考えました。今自分は「何がしたい」のか……………。」

それまでうつむいていたサトシが、顔を上げた。  
その瞳には……………光が戻つていた……………

サトシ「俺は……………みんなを守りたい。そのために……………強くなりたい。そして……………ロケット団を倒したい……………！」

サトシが静かにベンチから立ち上がる。

サトシ「まだ「どう強くなれば良いか」なんて解らない……………。でも、もう俺のせいで仲間が危険にさらされるのは見たくない。だから……………俺は強くなる。今俺にできる、俺のやり方で。それが……………俺がやりたいことです。」

シロナ「……………そう。」

シロナは微笑んでいた……………

仲間のために、か……………それがあなたの強さなのね……………

ザリツ……………サトシがシロナの方へ振り返る。その顔は真剣

そのもの。

サトシ「シロナさん、俺とバトルしてもらひませんか？」

サトシの皿は真つ直ぐシロナを見据えている。

サトシ「一体だけでかまいません……。お願ひします！」

そつと頭を下げるサトシ。

サラ……微風が再びサトシとシロナを撫でた

ザツ…………シロナも立ち上がる。

シロナ「その勝負、受けて立つわ。サトシ君の決意の強さ……見せてもらおうかしら？」

サトシ「はーー！ありがとうございますー！」

ジュンサーが訓練用のバトルフィールドを貸してくれた。所内の警官達もチャンピオンの突然の来訪、しかもバトルを繰り広げると言うのだからびっくりだ。

ザツ……ザツ……ザツ……

サトシがフィールドのトレーナーボックス（線で区切られたトレーナーの立ち位置）へ入り、シロナと向き合つた。

シロナは不敵な笑みを浮かべている…………そして、

チヤ…………と、モンスターボールを構えた。

シロナ「天空に舞え、ガブリアス！」

ボンッ！

ガブリアスが雄叫びをあげながらフィールドに降臨した。

サトシ「ガブリアスか…………。」

ガブリアスはシロナさんの手持ちの中では間違いなくエース……  
ならいひは………… アイツに行つてもいひつかない！

サトシ「リザードン！君に決めた！」

ボンッ！

対するサトシはリザードン。彼のエースだ。  
フィールドに向かい合ひ橙色の竜と紺色の竜……

サトシ「…………」

どれだけ考えても………… どれだけ悩んでも…………

ガブリアス「…………」  
リザードン「…………」

睨み合ひ「|回」…………

サトシ「シロナさん。手加減なしでお願いします。」

やつぱり俺には………… ハレしない！

シロナ「ええ。勿論よ。」

サア ..... 微風が吹く。

サトシはスウツと息を吸つた。

サトシ「行くぜリザーデン！」

リザーデン「ゴアアアアアア！」

リザーデンの雄叫びがフィールドに響き渡つた

## 俺の強さーサトシバシロナー！

ヤマブキ警察支所・応接室

カスミ「サトシのヤツ遅くない？」

タケシ「まあ……いろいろ考えてるんじゃないのか？」

サトシが外に出てもう一時間以上になる。確かに気分転換にしては遅い。

カスミ「考えるねえ……。アイツの脳みそで叩き出せる答えなんてたかが知れてるけど。」

タケシ「ハハ。確かに。だが一つ心配なのは……」

カスミ「心配？」

タケシ「あいつは……何でも一人で背負い込むクセがあるからな……。俺達がちゃんと見ておいてやらないと……。」

タケシがため息混じりに言った。

カスミ「…………ううね。そうやつていつも色々抱え込んで、で結局持ちきれなくなつて、アタシ達が拾うハメになるのよねえ……。」

「

どこか懐かしむように言つカスミ。

サトシはいつも無茶ばかり…………その度に自分達もその無茶に付き合わされて…………

でも…………アイツの無茶はいつだって、友達やポケモン達のため

全部自分以外の者のために…………良かれと想つてやつてる…………

カスミ「…………、別に良いけどねえアタシは、落ちたものの拾うのも。」

全部そうだとと思わないけど、アイツがもし拾おうとしなかつたら自分もそのまま放つておいただろうなと思う事も結構ある。落ちてるのはやっぱ……拾つてあげた方が良いもんね……

タケシ「ああ…………。俺もだよ。」

カスミもタケシも、きつとサトシのそういう所に惹かれたのだろう。そして今回もさつと放つておけなくなるのだひつ。と、一人が暖かい気持ちになっていたその時、

ドオオオン…………遠くの方で爆発音が聞こえた。

カスミ「な、何？」

ガチャ…………応接室のドアを開ける。

するとたまたま通りかかった警官達の噂話が聞こえた。

「おこおい聞いたか？今この支所にチャンピオンのシロナが来てて、しかも保護中のマサラタウンのサトシと草試合してたわ。」「マジか！見に行こうぜ。」

カスミとタケシは一瞬呆けて……

カスミ&タケシ「ええええええ！」？

ヤマブキ支所・バトルフィールド。

サトシ「かえんぬいしきー！」

卷之三

ズガアアアアアアアン！

二二の技かふ二かり合し  
爆発か起る

シロナ「アーリーハウスローー。」

ドリーム・バー

爆発で起きた砂煙を突つ切つてガブリアスがリザードンに迫る。

サトシ「リザードンかわせつー」

だが、

リザーブン「...?」

ズ  
ガ  
ン  
！  
！

ガブリアスのスピードについていけず、リザードンは攻撃をモロに

うけてしまつた。

吹き飛ばされるゴザードン、……………が、何とか立ち上がる。

サトシ「リザードン！大丈夫か！？」

うなずくワザードン。

くつ……やつぱ速いな…………！

圧倒的なスピードとパワーで相手をねじ伏せる…………それがシロナのガブリアスの戦法。

単純だが、だからこそ崩し所が少なく、強力。

そして、それを実現させているのはシロナの豊富な経験と、ガブリアスとの強い信頼関係。

サトシはシロナを見る…………

あの時の…………ロケット団に見せたあの獣の目ではない…………正々堂々、相手に敬意をはらい、持てる力の全てをもつて立ちはだかる、絶対強者の目だ。

シロナ「あなたをほる！」

ガブリアス「ガウッ！」

ズボオ！

これまた物凄いスピードで地面を掘り進むガブリアス。

サトシ（よし！チャンスだ！）

あの攻撃は空を飛んでしまえば当たることはない…………

地面から出てきた瞬間を叩いてやる…………！

そう思ったサトシは迷わずリザードンに指示を送った。

サトシ「飛べリザードン！」

その瞬間、

ボコオー！と、ガブリアスがリザードンの真下に現れた。  
が、既にリザードンは空中にいた。

サトシ「モグラたたきだぜ……リザードン……かえん……」

シロナ「りゅうのはビーフー！」

サトシ「…？かわせ…」

ビュウッ！

とつさの指示だつたが、リザードンは何とか攻撃をかわした  
……でも、

サトシ（こくら何でも反応早すぎだろ………？）

シロナはガブリアスが地面から出てきた瞬間に既に指示を出していた。  
しかも次の手を考えていたサトシよりも早くだ。  
まるで全てを解っていたかの様だつた……

サトシ（何かを狙つている……………？）

その通り。シロナの口元は不敵な笑みを作り出していた

シロナ「ガブリアス！空中へ！」

ビュオッ！と、

一気に空中へ飛び上がるガブリアス。  
そして、

シロナ「回り込んでビリ、パンクロー！」

その瞬間、

ズツガアアアン！！

ニホン - パラア - ?

「アーティストは？」

何と、シロナが指示を出し終わった直後、ガブリアスがリザードンの後ろに回り込んでいた。

自然風扇で涼さうな空気が吹いて、口を開けて喜んでいました。

シロナ「落とさせないわよ？ガブリアス！連續でドラゴンクロー！」

ヒュンッ！ズガア！バキイ！

リザーデン、「ゴシ.....グホ.....ー?」

地面へ落ちる前にガブリアスが猛スピードで回り込み、リザードンを空中へ打ち上げる。

これがエハ正捕獲した状態だ。

サテシ(左) 遺稿集(一)

もはやサトシもまたここに反応できない

シロナ「知つてたサトシ君？ガブリアスは地上戦よりも空中戦の方が得意だつてこと。」

サトシ「……………！」

やつこい」とかよ……………！

わつきの「あなたをほる」攻撃は最初から空中戦に持ち込むためのもの。

こいつが空中へ逃げるように仕向けたってわけか……………！

そして……………

ズッガアアアン…！

リザードンが地面へ叩きつけられ、辺りを砂煙が包んだガブリアスも静かに地上へ降りてくる……………

サトシ「ワ、リザードン……………！」

砂煙が晴れていく……………リザードンは地に伏したまま動かない

サトシ（つ、強すきい……………！）

まさに圧倒的。何もできぬまま、あつといつ間に追い込まれてしまった

サトシ（これが……………チャンピオン……………！）

サトシはこいつかのワタル戦を思い出した

あの時も……………ワタルのカイリューに圧倒され……………何もできぬまま惨敗した……………

今は……………あの時と似ている……………

似ているどいのか……………同じじゃないか……………

サトシ（俺は……………また何もできなこまま負けるのか……………）

…？）

ギリッ

悔しかがつのつ…………拳を強く握りしめる  
ゆつくりと顔を上げ、シロナとガブリアスを見る  
シロナもガブリアスも…………ただ静かに立つてこちらを見ている

まるで何かを待つて居るかの様に  
するとい、

ザリッ

何とロザーデンが…………立ち上がろうとしていた。

サトシ「ロザーデン…………。  
リザーデン」「…………ツー」

だが…………サトシには次の手が思い浮かばない  
勝利のビジョンが全く浮かばない  
圧倒…………されていた

サトシ（何だよ俺…………。強くなるとかほれこでおきながら  
結局同じじゃないか…………。）  
シロナ「…………」

もう終わりなのか…………？  
リザーデンはふりつきながら立つて居る  
悪いリザーデン…………お前はまだやる気なの？…………次の手が  
全然思いつかないんだ…………

サトシ（もづく）ダメだ。」

「その時だつた！

「サトシイイイーー、ビシッとしなぞこよおおーー。」

不意に……声が響いた。

サトシは音源の方へ目を向ける

カスミ「それで終わるつもりーー、アンタ昔の方が強かつたわよーー！」

見ると……いつの間にか野次馬に混じつてカスミとタケシが  
フィールドの端に立つていた。

サトシ「

唖然とするサトシ

昔の方が……強い？

ワタル『君の再挑戦を心から待つている。』

サトシ「…………！」

頭の中に声が響いた。

そうだった…………俺…………

ヒュウ…………と、風がサトシの髪をなびかせた…………  
同時に、その風に心の中にかかつっていた霧が吹き飛ばされた感じがした。

そして再び、サトシの目が透き通る。

サトシ（俺…………負けず嫌いだつたんだー）

ザツ！

サトシが力強く地面を踏み、真っ直ぐにシロナの目を見た。

サトシ「シロナさん！勝負はまだこれからですよー」  
シロナ「…………やつになくちや。」

シロナは笑っていた…………とても優しく…………  
あなたの強さは…………やつぱり…………

サトシ「待たせたなリザードン！バトル再開だぜー！」  
リザードン「ゴオオオオーー！」

待つてましたと言わんばかりに吼えるリザードン。

その瞬間、リザードンの周りを赤いオーラが包み始めた…………

「もつか」だ！

サトシ「こよつしゃあ行くぞリザードン！かえんほつしゃだー！」

ゴオオオオーー！

とくせい「もつか」の発動により、威力が増した火炎が真っ直ぐにガブリアスに向かっていく。

シロナ「かわしてドーランクローー！」

ガブリアスは自慢のスピードを活かしすぐに接近するが、

サトシ「リザードン！地面にねつづく！」

ブワアアアー！

ねつづくが地面に当たり広範囲にまき散らされる。

ガブリアス「！？」

シロナ「！」

ガブリアスはかわしきれず、その熱風に一瞬怯んだ。

サトシ「今だ！はがねのつばさー！」

ズッガアアアン！

リザードンの渾身の一撃がガブリアスに炸裂！まともに攻撃を当たられたのは、これが初めてだ。

ガブリアス「……ツ！」

ザザアアアッ！

ガブリアスは体制を立て直し、一度距離を取る。

サトシ「まだまだ行くぜ！かえんほうしゃー！」

ゴオオオオ！！

再び業火がガブリアスに向かう……………が、

シロナ「ガブリアス！すなあらし！」

ブワアアアー！と、

ガブリアスの周りを巨大な砂の巻きが包み込む。

その凄まじい風圧により炎はかき消されてしまった……

サトシ「くつ……なんて威力……！」

巻き上げられた砂から顔をかばいながらサトシが言う。

これじゃあいくら攻撃しても、あの砂嵐にはじかれてしまつ……

近づくのも無理だろ！

たが……攻撃を防ぐことには勝負はつかない……

サトシ（どうする……！？）

俺はもうあきらめない！いつだってそつやつて戦つてきた！

考えろ……何か……何か手があるはずだ！

すると、ふとリザードンの足下に穴が開いていたのが見えた。

この穴はさつきの……待てよ？この位置……

その瞬間、サトシの頭に電撃が走った。

これだ……！

サトシ「リザードン！地面の穴にかえんほうしゃだ！」

リザードン「ゴアアー！」

ブオオオオー！

リザードンが穴の中に思い切り火炎を吹き込んだ。

カスミ「え!? 何やつてんのサトシ! ?」

サトシの指示の意味が解らず、思わず口に出てしまつカス!!  
するとそれとほぼ同時に、

まるで火山が噴火したかの様だ。

ガブリアス - ガアアア！？

シロナ一しまつた！六ね……！？

そう。この穴は先ほどガブリアスが掘ったもの。当然それはトンネルの様にリザードンの足下の穴と、ガブリアスの足下の穴とを繋いでいる。

サトシは幸運にも二体か穴の付近に居たのに気がつき、その穴を通してガブリアスに業火を吹き込んでやつたのだった。

シロナ「！」

苦しそうにつめきをあげるガブリアス。

見るに砂嵐に炎が巻き込まれ、まるで炎の竜巻の様になつていた。その凄まじい熱量にガブリアスは苦しんでいたのだ。

タケシ「おいおい…………。」

カスミ「燃え移らないわよね?」「コレ…………。」

タケシもカスミもその他の野次馬達も…………その強大な火力を前に呆気にとられていた…………。

シロナ「こままじゃジリ貧ね…………ガブリアス! ドラゴンダイブ！」

ギュアアー！！と、

ガブリアスが凄まじいエネルギーを纏つて炎の竜巻を突つ切り、こちらへ向かってきた。

突つ込んできただか！なら…………こつちも受け立つまでだ！

サトシ「リザードン！ 最大パワーでオーバーヒートだあ！！！」

ガガガガガガ…………リザードンにエネルギーが蓄積する…………

ガブリアスがリザードンに迫る…………  
そして！

ガブリアス「ガアアアー！！」

サトシ「いけええええええええええええ…………」

リザードン「ゴアアアアアー！！！」

ドッパアアアアアアアアアアー！！！

二つのエネルギーがぶつかり合い、大爆発を起こした。

タケシ「うおっ…………！？」

カスミ「キヤ…………！」

その爆風は離れた所で見ていたカスミとタケシにも影響を及ぼした。

凄まじい

モクモクと立ち込める砂煙

緊張の一瞬

サトシも シロナも カスミも タケシも 野次馬達も

静かにフィールドを見つめる

サトシ 「…………」  
シロナ 「…………」

サトシの顔に汗が流れる  
そして

ビュウッ と、

突然風が吹き抜け、砂煙を晴らした

そこには

ガブリアス 「…………」  
リザードン 「…………」

静かに地に立つガブリアスと  
静かに地に伏すリザードンの姿

審判 「リ、リザードン戦闘不能! よつて勝者、チャンピオンシロナ

!」

シン………… 辺りを静寂が支配する  
そして、

歓声が、ブイールで再び響き渡った。

カスミ「あちやー……負けちゃつたわねえ。」

たのが悔しいな……。」「

カスミでモハム、…………結局ここに行き着くのね

バトルフィールドに立つサトシを見ながら、一人は微笑んだ……

サトシ「ふう……。負けちやつたか……。」

悔しそうな顔を浮かべるサトシ。だがそれはすぐに笑顔に変わった。

シロナ「サトシ君。」

シロナがサトシの方へ歩いてきた。

シロナ「あなたの決意の強さ、見せてもらつたわ。」  
サトシ「ハハ……。結局負けちゃいましたけどね。」

カーナ」「 サニ。 機、 一ハビ、 ナラ、 リテカレ」

「シロナ、礼を言うのはいいですよ。良いバトルをありがとうございました！」

握手を求めるシロナ。

サトシもそれに応え、一人は握手をかわした。

パチパチパチパチ

フィールドの周囲からはたくさんの拍手が.....

カスミ「サトシッ！」

バシッ！

駆け寄ってきたカスミがサトシの背中を叩いた.....

サトシ「つてえ！？おま.....せつかくの良い雰囲気が台無じじゃんか！」

カスミ「アンタ雰囲気とか気にするタイプだっけ？」

サトシ「うるさいな！俺にとつてバトルは唯一の見せ場なの！」

カスミ「ポジティブなんだかネガティブなんだか解らないわ.....」

ギヤーギヤー言い合う二人.....

いつまで続くかと思いきや、サトシがいきなり黙りこんだ。急にペースダウンしたサトシにカスミはハテナを浮かべた。

サトシ「その.....さつきはありがとな.....。」

カスミ「え？」

サトシ「.....わしあ前が叫んでくれなかつたら.....俺多分.....」

バシッ！

サトシの言葉を遮り、またしても思い切り背中を叩くカスミ。

サトシ「つてえ！？」

カスミ「バーカ当たり前よ！感謝しなさいよね！あ、あそこのかつエでおござりなさいよね！」

サトシ「だからお前は雰囲気をだなあ.....！」

タケシ「おい一人共、場所をわきまえ.....つてはーシロナさああ

ああん！…バトルの汗をお茶で流しに行きませんか？自分とやーのカフェに…

カスミ「アンタ」」の場所わきまえなさいよー。」

サトシ「はあ……。もうこーよ。」

シロナはそんなサトシ達三人をしばらく見ていた。  
とても優しい笑みを浮かべながら……

サトシ君…………あなたの強さは…………仲間がいてこそそのもの  
なのよ…………

シロナ（…………大切にしてね…………。）

シロナが三人に歩み寄る。

シロナ「みんな、あそこのかフェでお茶でもしない？おいらのわよー。」  
サトシ「ホントですか！？やつたあー。」  
カスミ「アンタは少し遠慮と言つものを覚えなさいー。」  
タケシ「いやいやー」は自分が…………

四人は賑やかなまま、近くのかフェに向かつて行つた…………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6645z/>

---

ポケモンヒストリー

2012年1月13日14時45分発行